



## 山上憶良研究 一七九四番歌を中心にしてー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 公開日: 2016-04-15 キーワード: 作成者: 増子, 優二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008771">https://doi.org/10.32150/00008771</a>

## 山上憶良研究

### ——七九四番歌を中心にして

増子 優二

本稿は万葉集に於ける第三期の歌人、山上憶良について、憶良(以下、山上憶良を「憶良」と称する。)の歌人としての理解を、万葉集中の和歌を補助資料として考察しようとする、歌人論である。その問題提起となる七九四番歌については、該当歌の前に、憶良の上司である、大宰府の帥、大伴旅人(以下、大伴旅人を「旅人」と称する。)が「大宰帥大伴卿報凶問歌一首」を作っていたり、該当歌の後には憶良が「令反或情歌一首并序」「思子等歌一首并序」「哀世間難住歌一首并序」を「日本挽歌」と同日に嘉摩郡で撰定し、「筑前国守山上憶良」とサインがあることから、憶良と旅人との身分を凌駕した交友関係を構築していることが推定でき、それと同時に、別の巻では二人を中心にしてしばしば宴会が開かれた席上、詠まれた歌群を「筑紫歌壇」などと、後世、呼ばれ、旅人の官舎で何回か宴会が催され、その時に和歌を披露する機会が頻繁にあったことも推測できることは、拙稿で一部述べたとおりである(補注一)。

そして、このような一連の流れから、題詞にある「日本挽歌」を詠んだ憶良にはどのような作歌動機があり、和歌の配列から何が理解できるか、旅人との深い人間関係が憶良の作品にどのような影響を与えているか、キーワードは何かを細かく考察しようとするのである。その手がかりとして、幸いなことにこの歌に關しては左注に日付と作者のサインがあり、憶良は明白に「神龜五年七月二十一日」に、上司である旅人に「上」つていることが確認できる。題詞にも書かれているとおり、「挽歌」であるから、誰かの死を悼んで詠んだ歌であることが理解できよう。それらのことを踏まえて、考えられる可能性をいろいろな角度から検

討し、憶良の歌人としての理解に邁進する所存である。

ところで、「日本挽歌」の長歌には、「大君の遠の朝廷と不知火筑紫国に」とあり、少なくとも筑前国に關係している内容が想像できるだろう。そして、反歌には「妹が心の(七九六番歌)や「妹が見し」(七九八番歌)とあり、「妹」が誰を指し示しているのか、この段階では敢えて伏せておくことにするが、少なくとも「日本挽歌」には妹と呼ばれる女性が存在し、その方は筑前国と何らかの關係があり、單純に一連の歌の内容を継ぎ足してみると、筑前国に關する女性の挽歌ということになる。そうすると、憶良と旅人に近い人間關係に於いて、例えば筑前国で亡くなった女性がいたと仮定するならば、憶良の長歌一首、短歌五首を含めた「日本挽歌」は、不幸に会った者の気持ちに寄り添い、心情を代弁(代作)して作られた歌なのではないかと推測する。もしこの推測が事実から大幅に離れていないと仮定するならば、「日本挽歌」の作歌動機を、旅人の「報凶問歌」に觸発され、しばらく憶良自身の中で何かしらの形にすることを思いつき、それと同時に「令反或情歌」「思子等歌」「哀世間難住歌」を書きたためおきながら、「神龜五年七月廿一日」に「上」たのではないだろうか。この推測は次の章で触れることになるが、「日本挽歌」の配列から理解できたことでは、巻第四の六七三番歌から七九二番歌までは、大伴家持と相手女性との相聞の歌を中心に配列されており、次に巻第五の部立「雜歌」の後に旅人の「報凶問歌」(七九三番歌)があり、「日本挽歌」(七九四番歌)と七九九番歌)、左注に「神龜五年七月廿一日 筑前国守山上憶良上」とあり、「令反或情歌」(八〇〇番歌)と八〇一番歌)、「思子等歌」(八〇二番歌)と八〇三番歌)、「哀世間難住歌」(八〇四番歌)と八〇五番歌)、左注に「神龜五年

七月廿一日 於嘉摩郡選定「筑前国守山上憶良」とある。つまり、構成から前後の関連性を考察すると、巻第四と巻第五との連続性はあまりなさそうであるが、巻第五の冒頭は左注の日付や内容的な流れを考慮して推測すると、やはりそこには何らかの関連性があるのではないかと思われる。と言うことは、「日本挽歌」は突発的に憶良が詠んだものではなく、旅人に刺激を受けて作ったのではないかと思う所以である。

二

それでは、以上の推測に信憑性があるかどうか、以下に国歌大観番号七九四番歌を引用し、簡潔に現代語訳した後にその前後に配列されてある歌を引用することにする。

蓋聞 四生起滅方夢皆空 三界漂流喩環不息 所以維摩大士蓋し聞く、四生の起滅は、夢の皆空しきが方く、三界の漂流は、環の息まらぬが喩し。所以に維摩大士は

在于方丈 有懷染疾之患 釈迦能仁坐於雙林 無免泥洹之苦  
方丈に在りて、染疾の患へを懷くことあり、釈迦能仁は双林にいまして、泥洹の苦しみを免れたまふことなし、と。故に

故知 一聖至極不能拂力負之尋至 三千世界誰能逃黑闇之  
知りぬ、一聖の至極すらに、力負の尋ね至ることを払ふこと能わず、三千世界、誰か能く黒闇の搜り

搜来一鼠競走而度日之鳥且飛 四蛇争侵而過隙之駒夕走 嗟  
来ることを逃れむ、といふことを。一つの鼠競ひ走りて、目を渡る鳥且に飛び、四つの蛇争ひ侵して、隙を過ぐる駒夕に走ぐ。嗟

乎痛哉紅顔共三従長逝 素質与四徳永滅 何聞 借老違於要  
乎痛きかも。紅顔は三従と共に長く逝き、素質は四徳と永く滅えたり。いかにか凶らむ、借老、要期に違ひ

期獨飛生於半路 蘭室屏風徒張 断腸之哀弥痛 枕頭明鏡空  
独飛半路に生かむとは。蘭室に屏風徒に張りて、断腸の哀しびいよいよ痛く、枕頭に明鏡空しく懸かりて、

懸染筠之淚逾落 泉門一掩 無由再見 嗚呼哀哉

染筠の涙いよいよ落つ。泉門一たび掩ちて、再び見む由もなし 嗚呼哀しきかも。

愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無結 從來厭離此穢土 本願  
愛河の波すでに滅え、苦海の煩惱もまた結ほることなし。從來この穢土を厭離せり、本願に

託生淨利  
生をその淨利に託せむ。

日本挽歌一首

日本挽歌一首

七九四 大王能 等保乃朝廷等 斯良農比 筑紫國尔 泣子

大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の國に 泣く子

那須 斯多比枳摩斯堤 伊企随尔母 伊摩随夜周米

なす 慕ひ来まして 息だにも いまだ休め

受 年月母 伊摩随阿良祢婆 許許呂由母 於母波

ず 年月も いまだあらねば 心ゆも 思は

奴阿比随尔 宇知那毗枳 許夜斯努礼 伊波牟須弊

ぬ間に うちなびき 臥ゆしぬれ 言はむすべ

世武須弊斯良尔 石木乎母 刀比佐氣斯良受 伊

せむすべ知らに 石木をも 問ひ放け知らず 家

弊那良婆 迦多知波阿良牟乎 宇良賣斯企 伊毛乃

ならば かたちはあらむを 恨めしき 妹の

美許等能 阿礼乎婆母 伊可尔世与等可 尔保鳥能

命の 我をばも いかにせよとか には鳥の

布多利那良毗為 加多良比斯 許許呂曾牟企豆 伊

二人並び居 語らひし 心背きて

弊社可利伊摩須

家離ります

反歌

反歌

七九五 伊弊尔由伎豆 伊可尔可阿我世武 摩久良豆久 都

家に行きていかに我がせむ 枕づくつま屋さぶ  
摩夜佐夫斯久 於母保由倍斯母  
しく 思ほゆべしも

七九六 伴之伎与之 加久乃未可良尔 之多比己之 伊毛我  
はしきよし かくのみからに 慕ひ来し 妹が

己許呂乃 須別毛須別那左  
心の すべもすべなき

七九七 久夜斯可母 可久斯良摩世婆 阿乎尔与之 久奴知

悔しかも かく知らませば あをによし 国内  
許等其等 美世摩斯母乃乎

ことごと 見せましものを

七九八 伊毛何美斯 阿布知乃波那波 知利奴倍斯 和何那

妹が見し 棟の花は 散りぬべし 我が泣

久那美多 伊摩随飛那久尔

く涙 いまだ干なくに

七九九 大野山 紀利多知和多流 和何那宜久 於伎蘇乃可

大野山 霧立ち渡る 我が嘆く おきその風に  
是尔 紀利多知和多流

霧立ち渡る(補注二)

現代語訳は、序文から国歌大観の番号順に、

聞くところによれば、四生の生死は夢が全くはかないのと同じで

あり、三界の輪廻は腕輪の終わりが無いのと同じだと申します。それ  
で、維摩大士も方丈の居室で病気の苦しみを持ったし、釈迦如来  
も沙羅双樹の林で死滅の苦しみから免れなかった、ということです。

このような無上の二人の聖人でさえ、忍び寄る死の魔手を払ひのける  
ことができず、この三千世界で、誰が死神の追究から逃れることが  
できようか、ということを知りました。昼夜の二つの時がその速さを  
競い、あたかも眼前を通過する鳥が朝飛ぶようにすばやく時は過  
ぎ、また、四大から成る人の身はそれらの要素が互いに侵しあい、あ  
たかも戸のすき間を走り過ぎる駒が夕方に逃げ走るようにあわた

だしく消滅してゆきます。ああ痛ましいことです。うるわしい美貌も  
三従の婦道とともに永遠に消え去り、白い肌も四徳の婦道とともに  
永遠に滅びてしまいました。思いも寄らなかつたことです。夫婦偕老  
の誓いもむなし、寡鳥のように人生半ばにして連れにはぐれたよ  
うなどは、香りの高い園には屏風だけが淋しく張つてあり、断腸の  
悲しみはますますせずなく、枕もとには明鏡も見人なくかかつて  
おり、嘆きの涙は溢れ落ちてきます。あの世の門がいったん閉ざされ  
ると、また開けて見るすべもありません。ああ悲しいことです。愛欲  
の川波は消えてしまつたが(妻は逝つてしまつたが、それとともに煩  
悩の海も渡り終えたい(この世の煩惱も尽きることがない)。もとか  
らこの穢土を厭離したいと思つていた、本願どおりにあの浄土に命を  
よせた)。

七九四 大君の遠い政庁として(しらぬひ)筑紫の国に泣く子のよ  
うに慕つて来られて一息も入れる間もなく年月もまだ経たぬうち  
死ぬなど心にも思わぬ間にぐったりと臥してしまつたので言うすべ  
もするすべもわからず石や木に尋ねもできない。家にいたら無事だつ  
たらうに恨めしい妻がこのわたしにどうしろという気かにお鳥のよう  
に二人並んで夫婦の語らいをした心を反故にして家を離れて行かれ  
た

七九五 家に帰つてどうしたらよいか(枕づく)つま屋が淋しく

思えることだろう

七九六 かわいそうにこんなに短い命なのに慕つてやつて来た妻の心  
のあわれなことよ

七九七 残念だこうと知つていたら(あをによし)筑紫を隈なく見せ  
たらよかつた

七九八 妻が見た棟の花はもう散つてしまひそうだわたしの泣く涙  
はまだ乾かないのに

七九九 大野山に霧が立ち渡るわたしの嘆く息吹きの風で霧が立  
ち渡る

神亀五年七月二十一日、筑紫国守山上憶良献上します

とする先哲諸氏に従つておく(補注二)。

憶良は誰かの死に際して深い悲しみに陥り、長歌一首と反歌五首を詠んでいる。題詞にも「挽歌」とはつきり書かれていて、作歌動機は明白に死を悼むことにあるが、憶良は漢文で書かれている序文にお釈迦様の思想を引用し、長歌でも誰かの突然死にうろたえ、反歌でも仲が良かった夫婦の死別について、十分すぎる理解を示しながら妻に先立たれた夫の気持ちに寄り添っている姿が推測できる。ここまで悲しみを露わにしてまで死者の魂を弔わなければならない方は誰なのか、ここではそれらについて論考することは現時点で本論の流れから外れてしまうかと判断するので、一旦保留しておくことにするが、仮に憶良自身の妻であったとしたら、自分の身内の不幸にここまで感情をむき出しにすることがあるだろうか。また、憶良の妻でないとしたら、例えば、旅人の妻であったとしたら、筑前の国での上司と部下の関係から、弔文とも言える作品群を作ったとしても不思議ではないように思えてならない。疑問はとりとめもなくわき上がるがこれ以上の考察は、別の章で再び取り上げることにする。

それはさておき、巻第五の構成や配列から「日本挽歌」を俯瞰すると、巻第五の巻頭に旅人の「報凶問歌」が配列されていて、その内容から推測すると、かなり世間に対して絶望的になっている。そして「日本挽歌」の後に「令反或情歌」「思子等歌」「哀世間難住歌」が配列されていて、驚くことに左注には「日本挽歌」と同じ日付が付されている。ということから想像を豊かにすると、同日に憶良は旅人に「日本挽歌」を「上」つていて、「令反或情歌」「思子等歌」「哀世間難住歌」を撰定しているわけで、私にはこれらの歌群が無関係であるとの理解にはすくなく苦しむ。また、旅人の「報凶問歌」とはほぼ一箇月間の空白期間があるが、私には一連の流れがあるような気がしてならない。

もし、私の推測が本筋から大きく離れていないと仮定するならば、次に「日本挽歌」前後に配列されている歌を披露し、そこから何点か問題点を拾っていくことにしながら、論考を続けることにしよう。

先程から題詞のみ提示していた「日本挽歌」の前後であるが、本文を

引用すると次のように見ることができ。

#### 万葉集巻第五

#### 雑歌

#### 雑歌

大宰帥大伴卿報凶問歌一首

大宰帥大伴卿、凶問に報ふる歌一首

禍故重疊 凶問累集 永懷崩心之悲 独流断腸之泣 但依兩  
禍故重疊し、凶問累集す。永く崩心の悲しびを懷き、独り断腸の涙

を流す。ただし、

兩君大助傾命纒繼耳 筆不尽言古今所嘆

向君の大き助けに依りて、傾ける命をわづかに継ぐのみ。筆の言を  
尽くさぬは、古に今に嘆く所なり。

七九三 余能奈可波 牟奈之伎母乃等 志流等伎子 伊与余

世間は 空しきものと 知る時しいよ

麻須万須 加奈之可利家理

ますます 悲しかりけり

神龜五年六月二十三日

神龜五年六月二十三日

令反或情歌一首并序

惑へる情を反しむる歌一首并せて序

或有人 知敬父母忘於侍養 不顧妻子輕於脱兎 自称倍俗先  
或人、父母を敬ふことを知りて、侍養を忘れ、妻子を顧みず脱

生 意氣雖揚青雲之上 身体猶在塵俗之中 未驗修行徳道之  
身、意氣雖揚青雲の上、身体猶在塵俗之中、未驗修行徳道之

兎よりも輕にし、自ら倍俗先生と称く。意氣は青雲の上に揚がれども、  
身体は猶し塵俗の中に在

聖 蓋是亡命山沢之民 所以指示三綱更開五教 遣之以歌令反  
聖 蓋是亡命山沢之民、所以指示三綱更開五教、遣之以歌令反

り。未だ得道に修行する聖に驗あらず。蓋しこれ山沢に亡命する  
其歌或 歌曰

民ならむか。所以に三綱を指示し、五教を更め開き、遣るに歌を以て

し、その惑ひを反さしむ。歌に曰く

八〇〇 父母乎 美礼婆多布斗斯 妻子美礼婆 米具斯宇都久  
父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し

志 余能奈迦波 加久叙許等 和理 母智騰利乃 可良久波志母  
世間は かくぞことわり もち鳥の かかわはしもよ

与 由久弊斯良称婆 宇既具都遠 奴伎都流其等久 布美奴伎  
行くへ知らねば うけ杵を 脱ぎ棄るごとく 踏み脱きて

提 由久智布比等波 伊波紀欲利 奈利堤志比等迦 奈何名能  
行くちふ人は 石木より 生り出し人か 汝が名告らさぬ

良佐称 阿米弊由迦婆 奈何麻尔麻尔 都智奈良婆 大王伊摩  
天へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大王います

周 許能提羅周 日月能斯多波 阿麻久毛能 牟迦夫周伎波美  
この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み

多尔具久能 佐和多流伎波美 企許斯遠周 久尔能麻保良叙  
たにぐくの さ渡る極み 聞こし食す 国のまほらぞ

可尔迦久尔 保志伎麻尔麻尔 斯可尔波阿羅慈迦  
かにかくに 欲しきまにまに 然にはあらじか

### 反歌

八〇一 比佐迦多能 阿麻遲波等保斯 奈保奈保尔 伊弊尔可

ひさかたの 天路は遠し なほなほに 家に帰りて

弊利提 奈利乎斯麻佐尔

業をしまさに

思子等歌一首并序

子等を思ふ歌一首并せて序

釈迦如来金口正説 等思衆生如羅睺羅 又説 愛無過子 至

釈迦如来、金口に正しく説きたまはく、「衆生を等しく思うこと、

羅睺羅のごとし」と。また説きたまはく、「愛しひは子に過ぎたりといふ

ことなし」と。

極大聖尚有愛子之心 況乎世間着生誰不愛子乎

至極に大聖すらに、尚し子を愛しびたまふ心あり。況や、世間着生、  
誰か子を愛しびざらめや

八〇二 宇利波米婆 胡藤母意母保由 久利波米婆 麻斯提  
瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして

斯農波由 伊豆久欲利 积多利斯物能曾 麻奈迦比尔 母等奈  
偲はゆ いくより 来りしものそ まなかひに もとな

可利提 夜周伊斯奈佐農  
かかりて 安眠しなさぬ

### 反歌

八〇三 銀母 金母玉母 奈尔世武尔 麻佐礼留多可良 古尔  
銀も 金も玉も なにせむに 優れる宝 子に

斯迦米夜母  
及かめやも

哀世間難住歌一首并序

世間の住み難きことを哀しふる歌一首并せて序

易集難排八大辛苦 難逐易盡百年賞樂 古人所歎今亦及之

集まること易く排ふこと難きは、八大辛苦、逐ぐることに難く尽くるこ

と易きは、百年の賞樂なり。古人の嘆くところ、今もまたこれに及ぶ。

所以因作一章之歌 以撥二毛之歎 其歌曰

所以に因りて一章の歌を作りて、二毛の嘆きを撥ふ。その歌に曰く

八〇四 世間能 周弊奈伎物能波 年月波 奈何流流其等斯  
世間の すべなきものは 年月は 流るることし

等利都都伎 意比久留母能波 毛毛久佐尔 勢米余利伎多流  
とり続き 追い来るものは 百種に せめ寄り来る

遠等咩良何 遠等咩佐備周等 何羅多麻乎 多母等尔麻可志  
娘子らが 娘子さびすと 韓玉を 手元に巻かし

或有此句云之路多倍乃 袖布利可伴之 久礼祭為乃 阿可毛  
或はこの句あり、云はく「白たへの 袖振りかはし 紅の 赤裳

須蘇毗伎 余知古良等 手多豆佐波利提 阿蘇比家武 等伎能

掘引き「よち子らと手携はりて遊びけむ 時の  
 佐迦利乎 等等尾迦祢 周具斯野利都礼 美奈乃和多 迦具漏  
 盛りを 留みかね 過ぐし遣りつれ 蝮の腸 か黒  
 伎可美尔 伊都乃麻可 斯毛乃布利家武 久礼奈為能 一云尔  
 き髪に 何時の間か 霜の降りけむ 紅の 一に云ふ「丹  
 能保奈須 意母提乃字倍尔 伊豆久由可 斯和何伎多利斯 一  
 のほなす一面の上 につくゆか 鞆が来たりし 一に  
 云 都祢奈利之 惠麻比麻欲毗伎 散久伴奈能 宇都呂比尔家  
 云ふ「常なりし 笑まひ眉引き 咲く花の うつろひにけ  
 利 余乃奈可伴 可久乃未奈良之 麻周羅遠乃 遠乃古佐備  
 り 世間は かくのみならし」ますらをの 男さび  
 周等 都流伎多智 許志尔刀利波枳 佐都由美乎 多尔伎利物  
 すと 剣太刀 腰に取り佩き さつ弓を 手握り持  
 知提 阿迦胡麻尔 志都久良宇知意伎 波比能利提 阿蘇比阿  
 ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き 這ひ乗りて 遊びあ  
 留伎斯 余乃奈迦野 都祢尔阿利家留 遠等咩良何 佐那周伊  
 るきし 世間や 常にありける 娘子らが さ寝す板  
 多斗乎 意斯比良伎 伊多度利与利提 麻多麻提乃 多麻提佐  
 戸を 押し開き い辿り寄りて ま玉手の 玉手さ  
 斯迦閉 佐祢可由既婆 比等斯欲能 伊久随母阿羅祢婆 多都  
 し交へ さ寝し夜の いくだもあらねば 手束  
 可豆惠 許志尔多何祢提 可由既婆 比等尔伊等波延 可久  
 杖 腰にたがねて か行けば 人には厭はえ かく  
 由既婆 比等尔迹久麻延 意余斯遠波 迦久尾能奈良志 多麻  
 行けば 人に憎まえ 老よし男は かくのみならし たま  
 枳波流 伊能知遠志家騰 世武周弊母奈斯  
 きはる 命惜しけと せむすべもなし

反歌

八〇五 等伎波奈周 迦久斯母何母等 意母閉騰母 余能許等

常磐なす かくしもがもと 思へども 世の理  
 奈礼婆 等登尾可祢都母  
 なれば 留みかねつも

神龜五年七月廿一日於嘉摩郡撰定 筑前国守山上憶良  
 神龜五年七月二十一日に、嘉摩郡にして撰定す。 筑前国守山上

憶良

とあり、以前に考察した六三番歌・一四五番歌・三三七番歌に見てきた形と違い、以前に見てきた憶良の歌は題詞と短歌で構成されていて、極めて単純明快に書かれているのに対して、七九四く七九九番歌は、題詞の後に漢文で書かれた序文を付し、憶良の作品は長歌と反歌数首があり、左注に細かな日付と撰定場所が書かれている。私はここに以前の作品とは明白な違いを見る。ことができようと思われ、巻第五を編纂した人は、かなり詳細な資料を手元に保有し、年代順にはあまりこだわつていないようであるが、特に序文の解釈を鑑みるに当たり、漢文の知識と仏教に造詣が深い旅人との、或る意味に於いて高い教養、または趣味の世界を解り合える者同士との、かなり太く結ばれたであろう。奈良時代の官僚であれば漢文は公文書で記述する手段であり、教養として当然身につけるものとして素通りするところであるが、もしこのような推測が成立するとするならば、旅人や憶良に接近でき、漢文の教養も持ち、彼らが歌つたものを形に残し、その詳細を克明に記すことができる人物の関与を推測したい。そして、その者が精力的に巻第五を編纂したと考えるが、いささか乱暴だろうか。巻第五の性格は針原孝之氏の論考に委ねるとして(補注四)、そこから少なくとも何が考えられるだろうか、話をもう少し進めることにする。

巻第五とそれ以前の巻(巻第一く巻第四)との比較を考えたとき、巻第五には漢文の序文がある歌群が存在し、万葉仮名も概ね一字一音式で書こうとしている意図が感じられてならない。それに對してそれ以前の巻には、漢文の序文は愚見には入らず、万葉仮名の表記も統一感を感じられない。作歌の状況は左注が詳しく、日付も有無に關して統一感を感じられない。因みに、巻第六も漢文の序文は愚見には入らず、

卷第五以前の形式とほぼ同様であろうと考える。そうすると、卷第五は前後の巻とは編集意図や形式が異なり、或る意味に於いて特異な性格を有する巻のように思われる。例えば、卷第五では旅人と憶良の作品には漢文の序が付されており、巻末には漢文のみの文章まで掲載されている。そこでだけから考えても、憶良と旅人は先にも触れたように、漢文も堪能で、並々ならぬ実力が有ることは容易に想像できよう。もう少し想像を豊かにするならば、卷第五以前に記載されている憶良や旅人の歌には漢文の序文の有無についてとも興味を湧く部分ではあるが、この件に関しては成立論に譲ることにして、一旦保留しておく。

(一) 針原氏の説をもう一度詳しくことにすると、卷第五だけに限つて筆録した者として旅人と憶良のどちらかを推測なさつてはいるが、私もこの説に同感で、その根拠として卷第五とその前後の巻を比較検討した時に、卷第五の特異性が改めて浮き彫りとなり、何故卷第五に限つて漢文の序文があるのか、しかもそれらの序文は旅人と憶良の作品群に付されており、卷第五の筆録者は旅人と憶良にかなり近い位置に存在し、かつ、作歌動機を漢文で書くことができ、それらを十分理解したうえで万葉集編纂時の資料として手元に残すことができる人物の正体として、先に列挙した二人のいずれかであれば、かなり信憑性の高い推測として首肯できるのではないだろうか。それから、「梅」をテーマとして宴席を設けた時の歌群(八五〜八四八番歌)も配列されており、誰が何番目にどんな歌を歌つたのか、割注で記載されていることから、かなり現実的な推測であるように思われてならない。さらに、卷第五は巻末付近に憶良による漢詩文が二本記載されており、和歌を詠まずに漢文だけで単独に作品を繰る特殊性、憶良の強く感じられる個人的な作歌動機としての傾向からも明白なように、本人や本人にかなり近い側近でなければ知ることができない情報も含まれていることから、私は針原氏の卷第五は旅人と憶良の筆録によるという説を支持する。ここまでの一連の推測が事実から大きく外れていないと仮定するならば、「日本晩歌」の前に旅人の「報吉凶歌」が配列されていて、さらに「日本晩歌」以降は中西進氏が御指摘する「嘉摩三部作」(補注五)に続いてい

ることも単なる偶然ではなく、左注からもある程度の理解が可能なるように、神龜五年七月に憶良は出張先で忙しくもやりがいのある個人的な仕事を、或る意味楽しみながら遂行していたのだろう。そのような経過から判断して、針原氏の「筆録者」とお書きになった表現の巧妙さに感謝申し上げる次第である。漢文の序文の諸課題については別項で述べる予定である。

ところで、先哲諸氏はどのような見解をお示しになつたのだろうか。私の手元に所蔵する書籍から四氏の論考を次に引用したい。

中西進氏は、他の巻との比較検討をなさりながら使用言語にまで考察なさり、

卷十三の長歌が宮廷儀礼にかかわる伝承詞章だということ、うべない得るところである。それに憶良が親近性を見せると言うことは、一応伝統的な歌謡のことばを彼が用いたのだと考えないこともない。しかし憶良はこれを古語として意識して用いたということではなくて、憶良の用いることばが、つねに前代の和歌とは異質なことがあったというのであろう。そのような非和歌語の組み入れが天平以降の和歌に多いことは、一つの傾向でもあったが、ことに憶良の和歌を性格づける無意識な用語行為がそれであった。

右に挙げた卷十三の四語(筆者注:「大君の 遠の朝廷と」「しらぬひ 筑紫の国」「言はむ術 せむ術知らに」「泣く子なす」「語らふ」の五語)は、繰返すようにさほど重大な属性をもたない。だからこの考え合わせる、納得されるように思うのである。たとえば、「妹の命」と歌われ(3一九四)、家持もそれを踏襲している(18四一)。「これなども人麻呂の歌は泊瀬部挽歌で、皇女たる死者のゆえに「命」といういい方が不自然ではないのだが、家持は都に残した大嬢をそう呼んでいて、両者の用語意識は同じではない。それに当てはめると憶良の意識は、歌中に二度現われる敬意表現と同様、死者である上司の妻に対するもので、家持とは異なるし、人麻呂ともひとしくない。それに対して、この当時の手紙などには「父母尊」などという

書き方が正倉院文書に残されており、そのような表現の意識の方が、皇女に対するよりも、はるかに近いだろう。つまり憶良にとつて、古い人麻呂を考えるよりも、日常目にした書牘語の方が、より適切であろうと考えるのである。

と述べられ、さらに、

憶良のことがば万葉集の中でいかなる位置を占めるかを考察して来た。その結果によれば、彼の用語の範疇は、官人語、常套語、口常語、生活語、歌謡語といった諸語で説明し得る性質のものであり、さらには独特なことばであった。つまり憶良の表現―以上にあえて単語の類似を無視し、連句の形で考察したのは、その意図があつた―は、さほど伝統なるものに親和しないものであつた。

と述べられている(補注六)。中西氏らしい観点と切り口で進められており、他の巻との比較の方法で私に示唆を与えてくれた御論考である。

大久保廣行氏は、「日本挽歌」という標題と巻第五の構成に注目な

さり、  
卷そのものの編纂に際しては、憶良の歌稿など原資料のあり方を尊重し、それをさらに分類して再構成することはしなかつたために、独立した巻としては標目を立てる必要がなかつたが、万葉集全体的の中に組み入れる段階で前後の巻に合わせて「雑詠」を総題として付したものと推測される。紀州本や細井本にこの題目表示のないことも、そんな事情を物語っているように思われる。

このうち、「日本挽歌」という題詞は、熊凝や古日を詠んだ場合と比較して、死者の名を具体的に示すことはなく抽象的である。しかし内容は、直前の詩文を承けて、「妹」の急逝に遭つた「我」の悲嘆を歌い上げたもので、本文と一体をなした三部作となつてゐる。亡妻の名を明らかにしないのは、その死が周知の事実であることと、遺された夫の立場で詠まれていることによるものと考えられる。

死去した「妹」については、憶良の妻とする説と旅人の妻とする説とが古くから対立しており、そのいずれに解するかでこの作品の意味

するところが全く違つてしまふ。  
となさり、さらに、

これを憶良の代作と認めれば、作者(「憶良」と作中の「我」(「旅人」)との関係はすつきりと理解できるのだが、それにしてもそれを「日本挽歌」と題するのは、今ひとつ内容に直結しない茫然とした印象を与えるような気がしてならない。時や場や内容を示す一般の題詞形式とは全く異なつて、なぜ「挽歌」としか表現しないのか。と述べられてから、憶良の表現方法や用字を詳細に調査なさつてゐる(補注七)。

原田貞義氏は、巻第五に関する先哲の論文を読みながら払拭できない疑問点があるそうで、

巻頭の歌が、何故大伴旅人の「報凶問歌」であり、それでなければならなかつたのかということがある。これは一見簡単なようであつて、なかなか難問な問題の一つである。無論、それをいう場合、私は巻五の編纂者並びに編纂事情の問題を念頭においているわけだが、しかし、それだけではない。

万葉集の二十巻を通観できる立場にある現在のわれわれには、さして奇異にも感じられないことも知れないが、集の巻頭に皇族でも著名な歌人でもない旅人の作品を配するというには、かなりの英断―もしくは抱負―といふべきか―が必要だつたらうと考えるからである。因みに、これに先行する巻々の初発の作品の作者を挙げる

と、

卷一 雑歌、雄略天皇

卷二 相聞、磐姫皇后・挽歌、有間皇子

卷三 雑歌、柿本人麻呂、譬喻歌、紀皇女・挽歌、聖德皇子

卷四 相聞、難波天皇妹

となつており、卷三、雑歌の部の人麻呂を除けば、全て皇族によつて占められているのである。

となさつてから、

こうした特殊な作品が巻頭に収録されたのは、ごく普通に考える

ならば、ちよと巻六前半部が金村の歌集に依拠したごとくに、巻五も何らかの資料によつたためであるからということができよう。事実、巻五が何らかの歌集ないしは歌稿に基づき編纂されたことは何人といえども否定できないであらう。問題は、その資料が、すでに一つの歌集の体を成していたか否かということ、歌書となつていたりすれば、それはいかなる編纂基準に基づき、いつ、誰の手によつて編まれたものかということである。とするならば、巻五の冒頭歌の特殊性を資料そのものの特殊性に帰してみたところで、何ら解答にならないのである。

となさつた上で、巻五は單純に作品を年代順に配列した歌集でないかと推測なさりながら、

その前半部に収録された作品の多くは、遠の朝廷、筑紫の国において制作されたものであり、その意味で、所謂「大宰府圍の歌」ということができる。しかるに、巻五所収のそれは、大宰府圍の歌の全てでも、またある特定の一時期の作品を年代順に蒐集編纂したものでもない。それらの中から、ある明確な基準に基づいて厳選し、採録された作品集なのである。因みに、大宰府圍の作品中から制作年月の判明せるものと、「報凶問歌」前後に制作されたと推定される作品を列挙すると左ようになる。

神龜五年

(五月〜六月?) 式部大輔石上堅魚朝臣歌一首(卷6・一四七二)

同 大宰帥大伴卿和歌一首(同・一四七三)

同 大宰帥大伴卿思恋故人歌三首(中の一)一首(卷5・四三八)

六月二十二日 大宰帥大伴卿報凶問歌一首(卷5・七九三)

七月二十一日 日本挽歌一首(同・七四〇〜七九一)

同 撰定 令反感情歌一首(同・八〇〇〜八〇二)

同 思子等歌一首(同・八〇二〜八〇三)

同 哀世間難住歌一首(同・八〇四〜八〇五)

以上六首山上憶良作

(七月〜十一月?) 大宰少式石川朝臣足人歌一首(卷6・九五五)

同 帥大伴卿和歌一首(同・九五六)

同 大宰少式石川足人朝臣遷任餞干筑前国芦城

十一日 大宰官人等奉拝香椎廟訖退帰之時馬駐干香椎浦各述

懷作歌

帥大伴卿歌一首(卷6・九五七)

大式小野老朝臣歌一首(卷6・九五八)

豐前守宇努首男人歌一首(卷6・九五九)

帥大伴卿遙思芳野離宮作歌一首(卷6・九六〇)

帥大伴卿宿次田温泉間鶴喧作歌一首(卷6・九六一)

これらはいずれも神龜五年の条に収められたものであるが、ただ作品によつてはその制作の順が多少前後するものもあるかも知れない。また、右の諸作品のほかでは、卷三、雜歌の部に収録された「帥大伴卿歌五首」(三三二〜三三五)などは、制作年月こそ明記しないがその内容が旅人の妻を失つて後の作らしく、「昔見し象の小河」に思郷帰心を託すなど、先の九六〇番の作品の歌風と共通するものがあつて、ほぼ同じ頃の制作になるものと考えられる。また「丹生女王贈大宰帥大伴卿歌二首」(卷4・五五三〜五五四)なども、天平元年二月の大宰大式丹比泉守の民部卿遷任の歌の前に配されているところからみて、巻五所収の旅人と京人某との往復書簡(八〇六〜八〇九)等とともに、神龜五年の制作になるものであるかもしれない。

ともあれ、巻五はこうした歌群中より、ごく限られた特定の作品のみを精選し、編輯されたものであることは間違いないのである。かくして、新規なる歌集の形成をめざして編まれた巻五、とりわけその劈頭を飾る作品、「報凶問歌」とはいかなる内容、性格を持ったものであつたのか。

と述べられている(補注八)。

稻岡耕二氏は、「日本挽歌」の漢文で書かれた序文に注目な

さり、先哲諸氏の論文を踏まえて、

憶良の「蓋聞……」の漢文に最も近いのは供養願文の類であること、

追善の対象人物や、願文には不可欠と思われる仏に対する帰依、賛仰の言葉が文中に見られないので、旅人の妻大伴郎女の百日忌に献呈されたとして、齋会などで読まれることを目的に作られたのではあるまいと考へられることと確かめられている(嘉摩三部作に「神龜五年七月二十一日於嘉摩郡選定」とあるので、七月二十一日が百日忌であったとしてもそこに憶良は出席しなかつたらしい)。と述べられ、嘉摩三部作に付された左注を旅人の妻の百日忌と推測なさっている(補注九)。

以上、四氏の論文を引用したが、論文の執筆観点が微妙に違うので、引用したい箇所が微妙にずれているかもしれないが、原田氏の詳細な調査をベースに考へて見ると、巻第五の特殊性は使用する文字や構成の段階で先行する巻との差異が歴然であり、筆録者の編纂意図も他の巻とは違うことが指摘されている。大久保氏が御指摘する題詞の書体も、何故先行する巻とは違うのか、私には思いつかなかつた発想だったので、物凄く刺激を受け、正に日から鱗が落ちるが如しである。神龜五年という整理も、いつ、どのような作品が作られたのか興味が湧く。中西氏の御指摘も鋭く、万葉集全体から、憶良の使用語からの御論考から新たな示唆を得た気持ちになった。稲岡氏が推測する「大伴郎女百日忌説」も意表を突かれた説であるが、その法事に参列できなかった憶良の胸中是如何ばかりか、図り知ることは困難なようだ。そのような意味からも、重箱の隅をつつくような近視眼的な研究も大切かも知れないが、流れや構成を把握した上で俯瞰するような研究姿勢が如何に大切か、痛感する体験に恵まれたことを感謝申し上げたい。

### 三

次に、題詞の「日本挽歌」の意味について考へてみたいが、「挽歌」という部立てを含めて、死に関する歌であることに違いはない。しかしながら、巻第五は「雑歌」という部立てがあるように、基本的には相聞や挽歌に含まれない歌全般を指すことになる。私はここに内容的なねじれ、筆録者の何らかの意図があるように思えてしかたがないのであるが、

「挽歌」という題詞にだけこだわらず、「報凶問歌」から「哀世問難住歌」までの配列を一連の流れがある歌群として認識し、この流れの中に「日本挽歌」が偶々含まれてしまったと仮定できないならば、誰かの死の影響を受けた形跡は歌の内容からも考察して払拭できないうえ、どこまでかはまだ恐縮するが、少なくとも誰かの死に即して作るようになったのは概ね異存が無いであろう。そうすると、問題なのは誰が死んだのか、それに対して旅人と憶良がどのような反応を示しているのか、その周辺を手がかりに推測を進めることにしよう。

このことについては先にも軽く触れた所であるが、巻第五の構成や配列・前後の巻々との比較の中で避けて通ることはできないだろうと判断し、今、ここに改めてこの問題を持ち出した次第である。それはともかく、旅人をして「世間は所詮虚しさで充滿しているのを知った時に、私はますます悲しくなつて泣けてくることだよ。」というような歌を作らしめ、憶良はその直後に、旅人の悲嘆に応えるように、旅人の嘆きに寄り添うように「日本挽歌」を詠み、「嘉摩三部作」につなげているのである。さて、死別とは、万葉歌人にとつてどのようなものであり、どのような意識が存在していたのか、私には知る術がないが、現代人の私にしてみれば、「永遠の別れ」程度の理解でしかない。では、万葉歌人たちの発想には「人間の魂は自由に浮遊し、特に大事な人が着物のひもを結んでくれた結び目がほどこけてしまうと気持ちが悪くなり、相手に良くないことが降りかかろうとする(例えば、「あゆひ」)に対する大まかな概念)意味は、私たち現代人が想像するものよりも重要かつ重大であろうし、これより先の理解は民俗学の範疇となるので、私の論文での記述は「こまめで保留しておく。

さて、先程の配列の観点から「日本挽歌」の後の歌群の接続のしかた等を吟味した時に、私には旅人が憶良のどちらかの妻が逝去した時の歌のように思われしかたがない。すなわち、旅人に虚無感を与える程にダメージを与える死、それに対して憶良が「日本」という言葉まで使つて挽歌を作っていることから考察した結果であるが、憶良に至つては「嘉摩三部作」に於いて、漢文の序文で經典を引用しながら世の中に潜

む苦しみを詠み、自己並びに旅人がその苦しみの中でもがいている姿は、身分の差に関係なく、年齢や境遇が近似していることから様々な束縛を超越して分かち合える人間関係を構築している様子が推測できるようで、誰にでも起こりうることであるし、誰もがこの苦しみにまづいていくことも考えられるので、正に人間の弱い部分に光を当てて、形にしたものではなからうかと思われてしかたがない。そのような根拠薄弱の邪推をめぐらせていくと、逆の発想として、旅人と憶良の二人のうちどちらかの妻がもし急逝したと仮定するならば、個人的な事情に深く浸り感情を抑えることができずにむき出しでも誰もそれをとがめることはできないだろう。もしこの逆転の発想が事実と照合してあながち間違っていないらうと仮定するならば、憶良の作品の傾向、特に弱者に向けられた優し理解を示すまなざし、旅人の感情的な表現と虚無感が一つの点から線となり、何らかの事情によつてまたは偶々巻第五の巻頭を飾ってしまったのではないらうか。そうすると、「日本挽歌」で逝去した人物は誰なのかと、改めて想像してみると、私には旅人の妻の死であるように思えてならない。

ここで注目したいのは、「等保乃朝廷等々筑紫国尔泣子那須」という表現であるが、この表現に旅人の家族を当てはめてみると、「遠の朝廷」とは筑紫国を指し、正に旅人が赴任している地であり、大宰府がある場所でもある。「筑紫の国に泣く子なす」とは大伴家持・書持兄弟であり、その當時をときめく名門、大伴家の家長と直系の子ともである。その家族が急に不幸に見舞われ、母親が急逝し、旅人も家持・書持もどうしたらよいか解らずうろたえるだけで、には鳥のように二人並んで座っており和やかに語らっていた姿はなく、心は息いとは違いないから離れていつてしまったらう、我が泣いている涙がいまだ干上がらないうちに」と詠んでいるのも、旅人の心を慰めているものであるとするならば、遺族の気持ちを代弁（代作）しているように思えてならない。そのように考えていくと、ただ「日本挽歌」を単独で抜き出して理解する方法と、構成や配列から見えてくるものも資料として理解の一助として使う方法とは、自然と結果が違ってくるであらう。その意味からも「嘉摩三

部作」は単独で突然作られた歌群ではなく、旅人とその遺族（家持と書持）の心情まで察し、經典の引用を根拠として、半ば強引に人間の自然な感情の中の悲しみを合理化し、逆に合理化することによって旅人の妻（の鎮魂歌として）のような気がしてならない。もしこのような推測が成立すると仮定するならば、八〇六番歌以降は日付にはばつきがあり、内容もそれぞれの歌に独立性がありそうなので、八〇五番歌までを旅人の妻の死に関する一連の作であることを想像したい。つまり、題詞の「日本挽歌」とは、大宰府の帥である旅人の妻の死をきっかけに憶良が大伴家の不幸を案じ、家族の気持ちを歌で代弁している姿を想像したい。だからこそ、大伴家の不幸は日本の不幸でもありとすると憶良の誇張しつつも本音を表した部分でもあろうし、特異性が發揮されているのであろう。だから、旅人と憶良との邂逅は、筆舌に尽くしがたい、強力な絆で結ばれており、名門の家長と寒門の一役人との差異は歴然としながらも、いろいろな条件を超越してお互いに理解し合えるものがあるのだからと推測する。

ところで、先哲諸氏はどのような説をご提案なさっているのだろうか。まず、中西進氏であるが、中西氏は「日本挽歌」が作られた時代は、すでに挽歌の衰退期に入っていたらうと推測なさつてから、

ということは、その基盤とする葬礼自体が変質していたからであり、人の死を悲しむ歌そのものの衰退など、あろうはずはないのだから、伝統的な挽歌儀礼における長歌の役割が後退していたということである。憶良は、そのような時点において、献土すべき長歌挽歌を作つた。その意図が「日本挽歌」という名称をとらせたと思われる。伝統的な儀礼に正面から対峙したのである。こゝばをかえていえば、一つの格式の意識といつてもよいだろう。

この名称に関しては、古来、漢詩に対する気持が説かれている。それもことごとく否定すべきではないだろう。しかし、それは、先の悼亡詩に対応していて「日本挽歌」といった、というのを、全面的に肯うのではない。たしかに憶良の次作には、漢文と長歌とが並べられている。だがこれらはいずれも長歌に付けられた序なのであつて、ちゃん

と題詞に「併序」と記されている。ところが当面の日本挽歌と悼亡詩とは、何の関係もなく並べられている別の作品に過ぎないのであつて、これを序と長歌なみに考えることは、常人にはできない。ましてや内容的に吟味した場合、作者の立場も違えば態度も違ふし、主題も別である。この両者の関係が他と違ふことはすでに村山出氏によつて詳述されたが、悼亡詩が文よりいつそう強く憶良自身の詠嘆となつてゐると考へるわたしは、さらに別物だと思ふのである。

と述べられ、さらに、

考へてみれば、われわれに残された資料における限り、この長歌は憶良が初めて作つた長歌であり、「日本挽歌」という名称も漢学者憶良の、なかならずく伝統的な和歌様式である長歌制作の緊張を物語るであろうが、その中に長歌を歌い出しながら、この叙事的・構成的叙述は、表現においても散文的にならざるを得なかつた。われわれはそれをむしろ憶良の獨創性として評価すべきなのだが、反面、その叙事という構成から解放されて、いつそう日常的な小抒情の様式に向かつた時、憶良は先代挽歌を組込むことが可能だつたのではなかつたか。しかも天智・十市という尊貴に対して寄せられた挽歌、宮廷歌人としての活躍を見つづけて来た人麻呂の挽歌を、そこに儀礼的格式と先に呼んだものへと立返つていった憶良の意識を、見る事ができるのである。

と述べられている(補注十)。古代の日本史に対する豊富な知識からの御考察で、衰退という発想が私には目から鱗が落ちる思いで引用させて頂いた。

大久保廣行氏は、井村哲夫氏や村山出氏の説を引用なさつてから、これを憶良の代作と認めれば、作者(「憶良」と作中の「我」)「旅人」との関係はすつきりと理解できるのだが、それにしてもそれを日本挽歌と題するのは、今ひとつ内容に直結しない茫然とした印象を与へるような気がしてならない。時や場や内容を示す一般の題詞形式とは全く異なつて、なぜ「挽歌」としか表現しないのか、また、なぜそれに「日本」と冠する必要があるのか。

と疑問を御提示なさり、さらに、

これらの漢詩のあり方から推察すれば、憶良の記した文章と詩はまさに悼亡の名にふさわしいものであるが、それを標題として掲げることにはしなかつた。そのあとを承けた和歌はそれと対をなす作品であるから、いわば「悼亡歌」とでも称すべきものであらう。しかしそのような表現はないので(万葉集では悼亡の語も用いられることがない)、それを含み込んだより一般的な「挽歌」を用いたのではなからうか。それが妻の死を悼む歌であることは前の悼亡詩文でも明らかだから、ただ死者の野辺送りの歌であることを示せばすむと考へたのであらう。分類名ではなく詩題としての本来の用法に拠つたのもそのことに由来する。歌であるから「挽歌」であることは都合がよいのだが、そのままでは「挽歌詩」のニエンスが強いので、漢詩ならぬ日本の歌であることを強調するために「日本」をその上に冠したものと考へられる。「日本」歌という関係でそれが「倭歌」であることを断つたのである。勿論それが、すでに契沖が「右の詩に対して、日本とはいへり(代匠記)」と指摘したように、直前の漢詩に相對応させた表現であることは言うまでもない。つまり「日本挽歌」は日本語や日本文による挽歌の意ではなく、悼亡詩と対をなす形で「妻の死を哀悼する倭歌」という意味を表そうとしたのではあるまいか。その意味では、澤瀉注釈の「日本」とあるは前の漢詩に対して倭歌といふ意味で用ゐたものと思はれる」という指摘は正鵠を射たものと言えよう。近くは辰巳正明氏も、「日本挽歌」という題を与へた憶良の意識も、哀悼の漢詩と対となる「日本」の挽歌というところにあつた筈であると明言される。(「挽歌論」『記紀万葉の新研究』尾畑一郎氏編)。

と述べられている(補注十一)。

中西氏が御指摘なさる人麻呂と憶良の比較の中で、宮廷歌人が挽歌を代作し、それらの行為が一時代を構築して来た人麻呂の時代に対して、憶良の時代はそごまでの勢いはなく、遠い過去を真似た形跡が無いわけではないが、時代と共に儀礼の執り行い方や人々の意識の変化も関係している所を鋭く御指摘している着眼点

に、中西氏の御意見の説得力が増幅されてくるような気がしてならない。大久保氏御指摘もまた然りで、憶良の内面や当時の語彙から考慮すると首肯できる部分が多々ある。

以上のことから総合的に判断すると、私が推測した大伴氏の危機は憶良にとつて国の危機と同等の意識を持つて題詞を付したという推測は成立しないことが判明したので破棄することにするが、歴史的な背景や憶良独特の用字法などを含めて、いろいろな可能性を検討した方が、より憶良の真実に迫ることができるとは思ふ。

#### 四

ところで、「日本挽歌」の長歌一首と反歌五首の歌群の左注について、もう一度引用すると、「神龜五年七月廿一日 筑前国守山上憶良上」と書かれており、「上」は「たてまつる」と読むのが一般的なようだ。そうすると、憶良が旅人に対して「日本挽歌」を奉ったことになるのだが、素直に考えればこのようになるところであろう。それともう一つは、「日本挽歌」の直後に配列されている「嘉摩三部作」との関係であるが、「嘉摩三部作」の左注にも「神龜五年七月廿一日」の日付があり、その後の既述は「於嘉摩郡撰定 筑前国守山上憶良」となっており、同じ日に「上」と「撰定」をしていることが理解できる。そのような意味から同じ日に憶良の身に一体何があったのか、私には謎が深まるばかりである。では、この疑問を少しでも払拭させるべく、以下に私見を述べてみたい。

私はこの拙稿で「日本挽歌」の作歌動機を「旅人の妻の死」と想像したところだが、逆に旅人に光を当てて「報凶問歌」を見ると、何に対して「空しく」「悲し」がついているのか、考えて見る必要があるのではないかと。私があるように考えた理由は、「報凶問歌」と「日本挽歌」の左注に付されている日付が約一箇月空いているもの、接近しているのではないかと考えて良い範疇のように思えるからで、つまり、憶良が「日本挽歌」を詠む一箇月前に、旅人には少なくとも悲嘆にうちひしがれてしまう何らかの事情があり、それが形と

なつて和歌として詠まれたのが「神龜五年六月二十三日」なのかもしれない。もしこの推測が概ね妥当であるとするならば、旅人は「左注よりも前に妻を亡くし、この日に気持ちが悪く落ちていて和歌を詠む気になつたのかも」かもしれない。そのようにいろいろと推測を巡らせていくと、旅人の心理状態は「妻の死」「葬儀」「喪」「和歌を詠む気持ち」へと移行して行つたのではないかと思えてならない。

この流れを踏まえて「日本挽歌」の左注を熟視すると、神龜五年六月二十三日からの約一箇月の空白期間を経て「日本挽歌」が存在する事実をどのように解釈するのか、推測してみる必要性がありそうだと。

例えば、六番歌の左注には「天皇十一年己亥冬十二月己巳朔壬午幸千伊予温湯宮云々」とあり、七番歌の左注には「戊申年幸比良宮大御歌 但紀曰 五年春己卯朔辛巳……」とあり、この間の年月がどれほど経過しているか定かでないが、日記のように日付が接近した連続性はなさそうである。巻第五の中で精査してみると、八〇五番歌の左注の日付が「神龜五年七月廿一日」であり、この歌から左注での日付がはつきり示されているものは八一—番歌の「琴娘子答曰」の左注で、「天平元年十月七日附使進上」とあり、二年以上の空白がある。比較的歌の年代がはつきり記されている巻第十七を巻頭から拾ってみると、二八九〇番歌の題詞に「天平二年庚午冬十一月大宰帥大伴卿被大納言云々」とあり、次に三九〇番歌の題詞には「十年七月七日之夜独仰天漢聊述懷一首」とあり、その次は三九〇六挽歌の左注と思われる記述に「右十二年二月九日大伴宿禰書持作三九〇八番歌の左注と思われる記述に「右天平十三年二月右馬頭境部宿禰老麻呂作也」とある。年代順にまとめられているようであるが、日付に接近した連続性は思見には入らなかつた。他の巻々との比較をすべきだろうが、紙面の関係で割愛し、別稿に委ねたいと思う。

それにしても、偶々取り上げて比較した左注や題詞での日付の間隔は、どうも日記のような接近性はなさそうである。これら

のことを踏まえて「報凶問歌」と「日本挽歌」の左注での日付の空白が一箇月というのは、近い方であろうと言えるのではないかもし一箇月程度の空白期間を近いであろうと言えるものと仮定するならば、私は憶良の意図として敢えて空白期間を設けて、旅人の感情の起伏がある程度収まったときに、旅人の悲嘆を我がものとして「日本挽歌」を書き上げたのも、その頃である。したがって六月に敢えて「上」ったように思えてならない。と言うことは、憶良は旅人の感情に配慮し、絶好のタイミングを見計らい、「こそぞと言うときに旅人に「上」したのではないだろうか」と推測してしまふ。

さて、先哲諸氏はこの辺りの事情をどのようにお考えなのであろうか。次にいくつかの論文を引用し、さらに理解を深めていくことにしよう。

中西進氏は、「日本挽歌」の構成に注目なさり、

この五首(筆者注：七九五～七九九番歌)は、まず長歌と緊密な反歌が一首あつて、追加のように二首が付けられていた。そして後日の詠を添えてたてまつたものが残りの二首だったわけである。しかも最後の二首は葬送儀礼の挽歌ではない。ちょうど豊前の鏡山に葬られた河内王を手持女王が悲しんだ歌(三四一七―四一九)のような立場で、憶良は死の哀傷を歌つたのであつた。巡察に出る日がやつて来てしばらく大宰府を離れることになつたからであらう。「妹の死に際して作つた歌はまだ篋底にある。それを離府に際して、当日の作を添えてたてまつつてから出立したのであらう。そう考えなければ、同日に後続の三部作ともどもに作るという関係も、また七月二十一日という死後遙かな時点で「家離ります」といつた歌を作る必然性も理解し難い。

と推測なさり、さらに、

巻五巻頭の旅人の歌が『全註釈』のいうように書簡の体をとつているとしたら、この「報凶問歌」は駅使に託された都人の歌である。それが駅使が帰京に際して詠まれたとすれば、その日付「六月二十三日」は、石上堅魚の歌(八一四七)の左注にいう「其こと既畢」つた時

点である。そしてこの堅魚の歌に対して旅人は和歌(八一四七三)を作り、一方また旅人は「思恋故人歌」(三四三八)を「別去而経数句がなげ」といふことは、死の衝撃から作歌のゆとりをもつまでに、これだけの日数が必要だったことを示しているのだらう。つまり六月二十三日という時点を弔問の事も終わった、死後数句を経た時点と考えることができるのではないか。その点からいっても、上掲の春夏の交、五月中旬という推定はほぼ当たつていふものといえよう。

憶良が長歌(あわせて反歌三首)を作つたの二十三日以後に作られた悼亡詩より、むしろこの方が作歌時期は早い。しかしその長歌はたてまつられるべく作られて、その場ではたてまつられることもなく終わった。それは右に見られたような旅人の傷心にとつては、当然のことであつたらう。やがて「数句」がすぎ、さらに月日が流れて巡行出立を機会としてたてまつられたのが、短歌三首を添えた原形の日本挽歌であつた。

と述べられている(補注十一)。

林田正男氏は、日本挽歌を含めた前後の作品を「日本挽歌群」と呼び、仏典の享受よりも仏教思想の投影として長大な詩歌文として完成し、それを憶良が旅人に献じたことを推測なさりながら、

旅人の「凶問歌」によつて、憶良の詩魂が揺すぶられたことを示している。濃厚に仏教思想の無常に彩られた日本挽歌群は、憶良の述作の契機が旅人の妻の死と「凶問歌」にあつたことを証するものである。

従来、この嘉摩三部作は国守巡行の任務と心情とを歌つたものと考えられている(『私注』『註釈』)。そして、生業の勧め、親の子に対する愛、老人に接した感慨を主題としてと考へられていた。しかし中西進氏は、この三部作の内容は前述の説とは全く異質であるとみる。そして、この三部作は国守などという立場とはおよそかけ離れた人間憶良の心情から歌われたものであり、「三作がそれぞれ感・愛・

無常を主題として緊密に連続した三部作」であると説く。

まず国守としての立場で詠じたか否かということを考察する。第一作の題詞に云うように「感つた情をもつ者を正しい方向にかえさせる」という意を歌に託そうとしたのであるから、この表面的な観点のみを主張すれば確かに国守としての立場を取ったことになる。しかし前に詳述したように「凶問歌」を旅人から披露された結果、それが憶良の創作意識にも強く影響したのである。かかる観点より三部作の内実にある憶良の心情を凝視すべきである。たしかに第一作には、中国の倫理思想を承けた教訓的な辞句や、当時の世相の反映と思われるところもある。しかしこれも一篇の構想の中に取り入れられた題材にすぎない。中西氏が説く如く、この内実はもっと深いところがあり、強い自己自身の心情、感情を契機として作られたものが当を得た見方であると考ええる。すなわち「感」「愛」「無常」という主題は、憶良の主我的命題という内なる心情より生じたものである。緊密に連続した三部作は、即興的な歌作を単純に連続させた作品ではない。そのことは、作品自身が雄弁にそれを語っている。三つの主題は、憶良の心情の中では、たがいに照応する構想的なものであったというよりも作品そのものが、その緊密性を示していることを、我々は看過してはならない。三部作は憶良の主我的命題が自然と選ばせた文芸的な三つの主題である。

この私見に対して、たとえば第一歌群の使用辞句には儒教的または律令(語)的辞句があるではないか、という反論があるやもしれぬ。確かにその辞句の使用があることは認められる。だからといって、この三部作が単なる百姓を教導した出張報告書的なものとみることに従えない。前にもみたように、それは一篇の構想の中に取り入れられた題材(辞句)にすぎないから、とくに固執するには及ぶまい。題材だけを讚めたものであれば、それは文芸の世界とは別世界のものとなる。そしてそれは、作品としての虚構をも含んだ創作歌である。このことを忘れてはならない。この点、憶良作品として例外ではない。我々はこの作品の文芸的な内実をこそ見るべきである。因みに、憶良

の場合でも彼の七夕歌十二首(巻八・一五一八、一五二九)などは、その文芸的虚構性を示す好例である。

さて、当面の三部作は従来、庶民の勸勉や教訓などを示し得たとみられている。しかし、この嘉摩三部作の内容は憶良自身が世の中を生きたるということを実験に思索して、その心境を吐露した文芸作品とみるべきである。国守の立場で歌作した、というよりも彼の主我的命題としての「世の中を生きたる」ということが自然と三つの文芸的な主題を生んだのである。すなわち、彼の主我的命題が、彼の文芸的創作意識を動かしたのである。

嘉摩三部作の最後の「哀世間難住歌」は、前述の「世の中」「傾命」「死」などに対する憶良の認識をよく示している。長歌の冒頭に「世間のすべなきものは年月は流るること……」と歌い起し、「……老男はかくのみならず玉きはふる命惜しけどせむすべもなし」と結んでいる。迫ってくる死、寿命は「すべもなし」というのである。この長歌には、「世の中」「老」「死」などに関連した辞句が多くみられる。この辞句を踏まえた構造をみても、憶良の主題がどこにあるか十分に察知しえる。そしてこの主題は、憶良が恣意的に求めたものではない。すでに前にのべたように、憶良の主我的命題が求めさせたものである。彼が世の中・人生・死などを真摯に思索した結果、必然的に帰結した文芸的テーマであると言える。

と述べられている(補注十三)。

井村哲夫氏は、

三編(筆者注)「嘉摩三部作」の(こと)からうかがえる憶良の工夫の第一は、虚構の手法であった。先に憶良は妻を失った夫(大伴旅人)の立場に立つ、いわゆる代作の手法を手に入れている。代作の手法は、憶良に始まったことではないけれども、憶良の場合には、日常的私的叙情の枠を超えて、憶良自身の志を言うための旨い方法として採用されたものである。この代作の手法が容易に虚構の手法をも手に入れる。「感情を反さしむる歌」は、漢文序において、「畏俗先生という感情・背徳の人物像を提示し、歌において、それへ向かつて語りかけ

るといふ形を構えた。「畏俗先生」はセリフを持たないが、作者の語りかけの向こうにその悲しいエゴを背負つた人物像が彷彿とあらわれてくる。一種對話劇的な効果を持つた。「子等を思ふ歌」の場合は、漢文書において、愛が逃れられない繫縛されて眠れぬというテーマを提示し、歌において、その愛に繫縛されて夜も眠れない親の姿を一人称独自の形で演じて(造形して)みせた。「世間難住といふことを哀しむる歌」では、漢文序において、世間難住というテーマを提示し、歌において前半に「娘子」の、後半に「ますらお」の、それぞれ盛年壯色の姿からやがて老醜無態の姿への変化を、明・暗・明・暗と廻り灯籠式に描いた。

憶良の工夫の第二は、倭歌のことばと文脈とを、思想や理論を担うに十分足るものとするための仏典語や漢語の倭語・倭文脈の翻案である。たとえば、「世間はかくぞことわり」「鶺鴒のかからはしも」「行方知らねば」「穿沓を脱ぎ棄る」とく、「石木より生り出し人か」「天路」「何処より来たりしもぞ」「安眠し寝さぬ」「銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも」「取り続き追ひくるものは」「百種の責め寄りきたる」「手束杖腰にたがねて」「か行けば人に厭はえ」「かく行けば人に悪まえ」「老よし男はかくのみならし」等々がそれぞれ漢籍・仏典の語や文脈を倭語・倭文脈にたくみに翻案したものであることが指摘される。

これらの工夫によつてまずはここに憶良の新文学が誕生していることを認め得る。「神龜五年七月二十一日、嘉摩郡に於て撰び定む。筑前国守山上憶良」と言う左注が、この三編製作に対する憶良の自恃の感情を、思わず洩らしているようである。漢文序の硬質な文体と、よりやわらかな倭語・倭文体を取り括つて見た場合、読者はこれらの歌を、作者憶良のある時一回限りの日常的な詠嘆、それらもかなり理屈っぽい歌として読み取ることに、おそらくはなるのではなからうか。これら三首の倭語・倭文体はなおいまだ、それぞれ独自の鮮明さや思想性とを漢文序によつて裏打ちされ、支えられながら立つていると言われるであらう。

と述べられている(補注十四)。

原田貞義氏は、

そもそも、「報凶問歌」も両君に呈示するだけに止めておいたならば、これほど重要な意味を持つ作品になつたかどうかははなはだ疑問しい。彼が、この作品を憶良に示すことによつて、彼自身も全く予想しなかつた新しい局面を迎えることになつた。すなわち、憶良は、それに応うに、漢文序、詩、倭歌の三部立てからなる壮麗な新文学をもつたのである。旅人の作品が書牘文、和歌という単純な形式であるのと比較し、憶良のそれは、「言」の占める重要性並びに構成の緊密さの点において教程の隔たりがある。しかし、憶良のそうした新形式の文学は、旅人の書牘文によつて触発され生まれたというのは正鵠をえてまい。憶良自身、すでに旅人に先立つて、そうした述作をなしていたと考えられる節がある。「嘉摩郡撰定」の三首などの作品がそれである。

とまれ、歌を忘れた歌人であつた旅人は、「筆言」を抛擲することによつて、はからずも歌を思い出した。その歌を彼は憶良にも示す。憶良は「日本挽歌」以下、嘉摩郡撰定の三首をもつてそれに報えた。旅人は、その憶良の諸作に、歌において「言」の果たす全く新しい効用、というよりきわめて重要な意義というものを感知したのであらう。すなわち、文と詩と歌の三者の構成が創出する新しい文芸境、漢と倭、叙事と抒情の文芸の渾然たる融合によつて醸し出される別世界を彼は垣間見たのである。そして、肝要なことは、それこそ、まさしく旅人が庶幾し、待望する仙境であつたということなのである。それは、漢文の素養を持つという点において、当代きつての知識人にして、「風流人」の家名を負う旅人にあつては、きわめて当然の宿志であつたともいえよう。旅人にとつて、それはまさに、眼睛を洗われるような思いであつたらう。

となさり(補注十五)、また、

憶良の嘉摩三部作の撰定の目的についても、憶良の「世間からの逆接の思想」の表明と見る井村哲夫氏の切れ味の鋭い説、中西進氏

の「感情・愛・無情を主題として緊密に連続した三部作」と見る卓説、村山出氏の憶良自身の内面の惑いと見る説をはじめとして枚挙にいとまがない。それらは何れも正しく憶良の歌文制作の意趣の正鵠を射ていると考える。

他方の「日本挽歌」献呈の意趣についても諸説があったが、現在は旅人の炊臼を慰めるものと見る説に落ちついている。それは正しかろう。だが、その両者に通底する菅の嘉摩撰定の三首献呈の意趣に関しては、未だ合点の行く論を知らない。それ故、そうした観点から、改めて三部作制作の意趣について見直してみたい。

三部作初発の「令反感情歌」を、憶良が順良なる国司として合格の旨意を休し、部内巡行中にその職務を歌にして、歌の好きな旅旅人に示したと解する『私注』の説は今では取られない。同様に、儒教的人倫の道を振りかざして父母や妻子を棄てて山沢に亡命する者たちを論じたと見るのも当たらないであろう。いかなる戸令や三綱五教といえども「天へゆかば汝がまにまに」とは説くことはあるまいし、この地上はあまねく大君がうしはく所であるとも揚言はしまい。況んや「天路」の遠き故に「なおなおに業をしまさに」と論ず道理はないからである。

となさり(補注十六)、さらに、

巻五の冒頭に載るのは「大宰帥大伴卿報凶問歌一首」であり、凶問に報えた返書の歌である。その書面から推すと、「両君」からもたらされた凶事の報に接し、一月ばかり前に妻を失った旅人が、益々世の無常を痛感し、まさに断腸の思いで認めたものようである。ここに両君からの書状を載せないのは、詠歌が入っていなかったからである。言うまでもなく万葉集は歌集であり、歌のない書簡は収録されることはないのである。

因みに、巻五では上記のような題材を付すのは異例のことで、前半部では末尾の三島王の作以外にはない。旅人が手控えとして書き留めて置いた私信に、このような題詞を付ける筈もないから、巻五の編者が巻頭歌に題詞を欠く不自然さに配慮して処置したのであった

ろう。

ともあれ、巻五がかかる形で編纂することが可能であったのは、旅人や憶良が自身の歌文を逐一控えとして保存していたことと、彼らの周囲で詠まれた歌文を丹念に収集していたからに他ならぬことは忘れてはなるまい。

と述べられている(補注十七)。

これらの御論考からあぶり出されたことは、左注にある「七月二十一日」は、旅人の妻の法事が行われる重要な日で、憶良は偶々地方巡幸の出張に出かけなければならぬ事情があり、この日には旅人に手渡せなかつたものの、旅人の感情を配慮して十分吟味した上で「撰定した」とが窺える。その周辺の詳細は中西氏の論文が歴史的な知識を裏打ちとして大胆に述べられており、中西氏の推測が事実と大きく違いが無ければ、かなりリアルな状況がイメージできそうだ。林田氏は「日本挽歌」と「嘉摩三部作」の相関関係を、歌の内容から総合的に判断して連続性は無いだろうと推測なさっており、「日本挽歌」と「嘉摩三部作」をそれぞれ単独の歌として考えるところのように考えられなくもないが、私に先指摘したように「日本挽歌」から「嘉摩三部作」の間に介在する約一箇月の空白期間をどのように解釈するのか、中西氏が御指摘する旅人の妻の死に対する法事という要素がもしあるとしたら、断片性を介する、特筆すべきものは含有しない繋がりではないのだろうか、私には大きな疑問が残る。井村氏の、倭歌の使用語からの御論考は私には全く欠けていた発想であったので日から鱗が落ちるが如しであるが、憶良の歌や使用する万葉仮名にはその特殊性があるらしく、私には「日本挽歌」と「嘉摩三部作」に限ったことでは無いように感じられる。しかしながら、憶良の漢文の知識が倭歌にも活かされ、漢語の固いイメージを和歌が払拭し、意識的にリンクさせているという考え方は、首肯できる説であろう。原田氏も「日本挽歌」は旅人の炊臼を慰めるものであり、「嘉摩三部作」は中西氏・井村氏・村山氏の御論考に賛成なさっている。ということとは、「日本挽歌」と「嘉摩三部作」の間には連続性が無く、偶々日付が近く、配列も近かつたということになりそうであるが、

私には憶良の作品の傾向が大きく変化し、漢文の序文や仏典から引用したような形跡が明白なところから推測して、まるで憶良自身の知識を披露する姿、別の言い方をすると憶良自身が保持する教養をこれ見よがしに見せつけるようにも感じられて、或いは、和歌の非公式的な、柔らかなイメージに対して、漢文の公式的な、固いイメージを比較することによって両方の良さを補い合っているのかもしれない。そして、憶良をしてここまで大きく変化せしめた理由を考慮すると、私には、「日本挽歌」の影響が皆無であるように推測できない。かといって代替案があるのかというと、今は思いつかないので、これ以上の言及は保留しておく。

## 五

それはさておき、ここまでいろいろなことを推測しながら憶良の「人となり」を考察してきた。そこにはかなり私の無理で乱暴な推測があったかもしれないが、憶良のことに関して何か言いたい、こんなことを考える可能性は無いかと、巨視的な理解をしながら歌人論を深めたいという一心であり、その他に他意はない。余りにも言葉足らずで根拠薄弱の粗論と認識するならば、私の能力が至らないと処理していただき、御寛恕を願う次第である。

さて、話を元に戻すことにしよう。かねてから憶良に関する歌人論、作品研究論は、今まで研究書として具体的な形となつて世に出され、憶良に関する研究は日々進んでいるように感じる。また、様々な研究者からいろいろな指摘があり、少しずつ憶良に関する理解が深まっているように感じる。しかし、あまたある論文を全て集め、諸説を融合しても憶良に関して全て言い尽くしたという到達点には至っていないのではないかと感じる。と言うことは、それだけ憶良の世界は懐が広く、未知数の部分が多いのではないかと思う。私も今回、「日本挽歌」をおして憶良の理解の一端を披露してみたのであるが、私の場合はかなり迫り切れていない手応えしかない。つまり、憶良に関してはまだまだ問題点が山積みになつており、決定的な核心に至っていないのだろう。それだけ

に、憶良論について開拓する部分があり、やり甲斐があるというものであろう。故に、この拙稿も万葉集、憶良の研究に一石を投じて揺さぶりをかけたかと思う次第である。

それにしても、憶良の漢文の力はどこで培ったものであろうか。渡来人説・非渡来人説はともかく、そのことが憶良の漢文の力を理解する資料となり、証拠となるのか、ひいては、歌人論や作品論に何らかの影響を与えるのか、考えたときに、私は甲斐がどこなのかというよりも、どういう機会に知識を吸収し、駆使するまでどのような経過をたどったのか、そのことを推測することの方が有意義なように思う。そのように過去を遡ると、六三番歌に見られるように、無位にして遣唐使に大抜擢されている事実は大きく思われてしかたがない。大抜擢を受けるからには、何か特殊な能力が必要とされ、異国で研修したことを帰国後に還元する使命を帯びていることを考慮すると、例えば、当時、長安で話されていた中国語(当時の共通語)に堪能で、派遣に関して何も問題が無いほど熟達しているスキルがあったかもしれないし、あれほどの仏教の知識があるところから判断して、仏典を自由に読みあさる環境に生きていたことが推測されるし、それらと併せて大陸の文化の何かを吸収して本国に還元するにふさわしいと判断できる能力があると考えるのが自然だろうし、それにプラスして人物的にも良好で無ければ、国家の大事を任せろことは無いだろうから、憶良には何らかの魅力的な専門性があつたのだろう。それが何なのか、肝心な所は資料がまつたく無いので、必然的に推測の域を脱しないことになるわけである。

さて、漢文で書かれた序文について、引用された仏典の典故との問題と絡めて研究されている場合が多く、漢文の序文そのものの研究を論文として発表なさっているものは以外と少ないことが判明した。私の蔵書の中でも四氏(四)の論文しか見当たらず、愚見に入らなかつたことに対して御寛恕を願ひながら、以下に引用する。

村山出氏は、

以上に見て来たような悼亡詩文に対して、長歌には対蹠的に伝統

的挽歌の発想への意識が特に主情部に窺われるようである。集中の用例から見て悲傷の情を表わす慣用語となっていて、倉野憲司氏が指摘されるように藤原永手の弔贈の詔(第五一詔)にも関わりをもつと考えられる「言はむすべ せむすべ知らに」、挽歌的悲哀の表現「いかさまに 思ほしめせか」と無縁とは見られない「我をばも いかのせよとか」、野中川原史満の奉呈代作歌「山川に鴛鴦二つ居て 偶よく偶へる妹を誰か率にけむ」(紀一一三)と類想の結句「にほ鳥の二人並び居 語らひし 心背きて 家離りいます」などはその徴証であり、題詞にふさわしく、先行の漢詩文に対する如くに宮廷的詞章にも接近を見せ、伝統的な挽歌的パターンを意識し過ぎていようようにさ感じられる。このような歌の制作を通して、憶良は旅人の悲哀の心に深く触れていることが反歌に認められるように思う。

と述べられている(補注十八)。

鉄野昌弘氏は、  
先の文とこの詩との関係に戻るならば、以上のように詩を解した場合、文に述べられた哀しみの果てに達した境地が、詩に表白されたところである、ということになるだろう。芳賀「憶良の挽歌詩」の言うとおり、詩は文の記述を前提にしなければ理解できない。しかし同時に、詩は文とは別次元に存するのである。序の位置に立ちながら、序とは題されなかった理由は、こうした両者の関係にあるのではないか。

それにしても、妻の死によって、この「穢土」に未練もなくなくなり、もはや往生を願うのみ、というものは、本当の悟りと言えらるだろうか。それは、実生は、亡妻の哀しみの極み、絶望の表現に他ならないだろう。この悟りすましたような言葉の内実が、仏説からずれたものである点に、詠者の心中になお「愛河の波浪」が大きく波打っていることを感ずる。またそれだけで、憶良の言辭であろうと思うのである。

と述べられている(補注十九)。

稲岡耕二氏は、  
改めて漢文・漢詩をていねいに読んでみると、憶良がどのような態

度でこれを記したか、その思いが強く感じられるようである。確かに憶良は仏説に従おうとはしていない。釈迦能仁は双林に坐して泥洹之苦を免るること無かりきとあるのも、「泥洹(涅槃)」は煩惱の寂滅であつて悟りの完成だから「苦」にあたるものではない。釈迦の死を憶良が「苦」と捉えるのは、曲解或いはすりかえであり、詩を忌避する「情」の働きによるだろうと考えられる(芳賀紀雄「理と情」憶良の相剋『万葉集研究』第二集、後に『万葉集』における中国文学の受容』に収録、参照)。

漢文ではあるけれども、それは旅人の「余能奈可波」の歌と同じく、この世を「空」と観る釈尊の思想への明らかな抵抗を示す内容であつて、大聖すらも逃れ得ぬ死を、忌避すべき「苦」と認めつつ、愛妻を奪われた悲しみを綿々と綴つてやまない。

同様に、漢詩にも「愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無結」と解脱を示すかのような表現を見せつつ、なお「従来厭離此穢土 本願託生彼淨利」とさらに往生を願っているのは、鉄野論文にも指摘するように、悟りや解脱とは無縁の、むしろ妻を失った者の悲しみの極みを表すものであり、心中に「愛河の波浪」の大きく波打っていることを感じ取るべきだろう。漢文に示されていた仏教への抵抗が、さらに短く、端的なかたちで、七言四句の詩に結晶させられているのを見る。それが相類似の思想傾向を表しつつ、あたかも「報凶問歌」を囲む同心円のように重なつて見える。そこに序的な位置にありながら、「なお序」とは銘打たないのがこの文の特殊なところと言われる理由もあるのだろう。

そうした漢文・漢詩に、さらに「日本挽歌」を並べてみると、憶良が大伴郎女の死や旅人の書簡と歌から、どれほど衝撃を与えられたか、想像することができると思われる。

と述べられている(補注二十)。

辰巳正明氏は「愛河の波浪は……」の漢詩を引用なさり、

神龜五年(七二八)に大宰府の帥として着任した大伴旅人の妻が、旅の疲れで急逝した。憶良は長官の心を慰めるために、無題の詩文と

「日本挽歌」を献呈する。この詩は、その時の七言詩である。詩の序文に「四生の生と死は夢のようで、三界の漂流は、環の上をぐるぐる」と永遠に廻るようだ。それで維摩大士は病の憂いを抱き、釈迦能仁も死の苦しみを逃れられなかった」と述べる。四生は、すべての生命の誕生を意味する。三界は色・欲・無色を指し、人が死ぬと、この三界を漂い流れるという、仏教の教えである。聖人でも死ぬのだから、まして我々も死から逃れるすべのないのだというのである。

そこで憶良は、この世というのは白と黒の鼠が競い走っているようなもので、地水火風は日々に変化し、たまたまに生は終えるのだというだから、美しい妻もこのように早々と世を去り、夫婦で共に老いるという約束も果たせず、たった一人残されて生きることになり、妻と過ごした寝室の屏風も無駄なものとなり、妻の愛用した鏡も空しく壁に掛かっているだけだと嘆き、黄泉の門が「たび閉ざされると、会うことはもうないのだと絶句する。

この序に続いて、愛河の詩が詠まれる。愛河も苦海も、人間が愛欲に流され溺れる姿の譬喩である。親や妻子、あるいは恋人への深い愛情をそそぐ姿である。それで釈迦が、「愛する妻子をも捨てよ」といった。それらが、悟るための障害となるからであった。そうした愛着の心を捨て、穢土から厭離して、浄土へと心を寄せることを願うのがこの詩である。愛も惜しみもない、煩惱を逃れた世界、それは生死を超えた楽土であり、妻はそこへと旅立ったのだという。

長官旅人の悲しみの心を慰めるには、十分に配慮された詩文であった。

と述べられている(補注二一)。

右に見た説から言えることは何かと考えたところ、「日本挽歌」という題詞の問題とも関連してくるのであるが、この問題を解くキーワードは「漢文(漢詩)・仏典・漢語」と和歌で使う言葉との関連性である。まず、漢文を使いこなす知識をどこでどのようにして体得したのかということであるが、私には想像すら浮かんでこない。少なくとも、憶良が生まれ育った環境の中で培われたものであろうが、それを調べ

得るだけの資料は手元にない。しかしながら、奈良時代の公式文書や日記などは漢文で書くことになっていたので、憶良が自然と培った官僚としてのスキルなのかもしれない。それと併せて、仏典を引用するだけの書物が手元に存在し、それらが必要な時に、時間を気にせずに読むことができる環境下にあり、気兼ねなく貸借できる存在がいることが推測できるが、先哲諸氏が既に「嘉摩三部作」の出典について詳細な調査がなされておられ、それらを参考にすることで様々な仏典から引用していることが理解できる。さらに、憶良はそれらをただ引用するだけではなく、或る意味、漢語と和歌で使う言葉を自由に使いこなし、それぞれの特色を理解した上で意味や解釈を補い合い、時には逆説的に使用しながら作品全体を構築しているような意図まで感じられ、私にはそれらの相乗効果がかなり計算されているように思えてならない。

次に、先哲諸氏の引用から理解できたことは、漢文の序文や漢詩・和歌がそれぞれ単独に存在するものではなく、それぞれが絶妙な緊密性を保ちながら作品を構成していることで、極論を言えば、漢文では堅苦しい、改まった雰囲気のある文体を敢えて書くことによつて、和歌が生き生きと、また理解しやすくなっているような意図を感じる。そこまでの推測はかなり乱暴かもしれないが、少なくとも言えることは、憶良の作品は巻第五を境に漢文の序文を駆使することによつて、憶良自身の表現領域が拡大し、憶良の真意に接近している段階にまで達することができたように思う。晩年近く表現方法の開拓は結果的に憶良の内面を開示することになり、それを理解し合える旅人との邂逅は何物にも代え難い喜びと満足感があつただろう。それがちょうど「日本挽歌」で本領が発揮されたとしたら、千載一遇の好機であり、憶良が作品を作る上で、表現上の発想をより拡大する転換期でもあつただろう。

以上の諸々の問題を含めて、憶良は何故「日本挽歌」を作ったのか、その理由を以下に述べたいと思う。先哲諸氏並びに私と考える方が一致したことは、誰の死を契機として作られたのかということであるが、これについては私も混沌とした経過を書いたとおり、旅人の妻の不幸によるものかそれとも憶良の妻の不幸によるものか、私の手元に所蔵

する資料の傾向と旅人の悲嘆からもたらされたであろう世の中に対する諦念、憶良の漢文による序文・漢詩・長歌・短歌の内容を考慮して総合的に判断すると、憶良にも偶々妻の不幸があったのかもしれないが、逆に憶良の性格から考えて、題詞に身内の不幸に際しての挽歌に敢えて「日本挽歌と、かなり大胆で大がかりな題を付けるだろうか」という疑問が生じる。また、少しこれらの作品を俯瞰して眺めてみると、配列からの検討を加えて考慮した時に、私にはどうしても旅人の「報凶問歌」の存在が気になり、さらに、部立を「雑歌」としながら「日本挽歌」を配列している構成は、単なる偶然とは思えないのである。故に、「日本挽歌」を作った契機を旅人の妻の不幸とであり、旅人の悲嘆を汲んだ上での代作と推測したい。

その点、先哲哲氏はどのように考えていらつしやるか、次に論文を引用したい。

中西進氏は、「日本挽歌」の作歌動機を、

旅人の妻の葬送時に歌われた長歌と三首の反歌に、後日の短歌二首を添えて七月二十一日に旅人に献上されたものと思われる。そのため伝統的葬送儀礼歌の格式を意識して歌われようとしているのだが、そのことばはまさしく憶良その人のことばであり、独自の表現によつて構成された長歌となったが、三首の反歌には先代挽歌を投影させようとし、そのことによつて伝統的格式の意識が首尾を占めることともなった。

そしてこれらの中で憶良の感じとつた「死」とは、愛と形との喪失であつて、失われた人間の追求は、空しく霧に象徴されるようなものであつた。

憶良はこれらを整えて旅人に献上した日、管内巡行の役によつて旅立つ。その日の、おそらくは夜、嘉摩の郡家において筆をとつたのが、次の三部作であつた。それは死を契機とする、激しい人間省察の内攻であつた。したがつて、この長歌の愛と形とは、そのまま三部作のそれぞれ第一、第三の長歌に引きつがれて主題となつたし、また以後の後半生の憶良の主題ともなつた。そしてこれらを観ずる時に生

ずる「感情は、哀亡詩を引きつぐ形になつているし、これまた愛や無常の悲しみを総括した形で、以後の憶良を捉えて話さなかつたのだうた。

と述べられている(補注二十二)。

井村哲夫氏は、

憶良には代作作品を多く作る傾向が見受けられる。「敬和為熊凝述其志歌六首并序」は麻田陽春の代作歌に和したものである。「日本挽歌」及びその前に置かれている無題漢詩並びに序文については従来論議のあるところであつたが、吉永登博士は諸説を批判検討しつゝ、その「妹を旅人の妻と見ることに矛盾が無いことを証明し、憶良の代作の作品のうちに数えるべきことを強力に主張せられた。「恋男子名古日歌」についても博士に説有り、「古日」が憶良の子ではなく、此の歌は「憶良が誰か知人が古日といふ子供を失つた際、その気持ちになつて作つた歌」と見るべきことを主張されている。

となさり、さらに、  
ところで、このような代作が、憶良の創作に於て著しい傾向として見られる場合、それは憶良のどのような性情に因るのであるうか。なにしろ、他人の不幸や苦悩の状況に際して、その人になりかわつて、むしろ大形なまでの身ぶり口ぶりでもつて悲歎の歌を奏でるのであるから、たしかに不幸な人への惻隱の情とか慰めといった言葉で、これらの作品が製作された動機を説明し、また憶良という人間に同情深い性質というものを考えたくなるのである。それは一面を説明し得ているとは思ふ。しかし、憶良の代作の本質を説明しおおせているものではないようにも思う。

いったい何が、憶良をして、まるで他人の不幸にとびつくような熱心さで、代作をさせているのであろうか。それを解明する為には先ず、憶良の「代作」の意味が検討されねばならない。

純粹に文芸論的立場からは、久米常民氏の詳説が有る。即ち氏は、憶良の代作の傾向を「市井にあつて見聞した人間性悲劇に取材して、その全貌をば歌に含む物語に創作することに、異常な興味をいだい

ていたらしい事実」として取り上げ、憶良を「次の時代の歌物語作者の先駆」として文学史的に位置づけられて居り、一々反論の余地がない。又、清水克彦氏は「自らの苦悩を相對化するための試み」として受け取られてゐる。

今私は、憶良の文芸的思考や方法の更に奥に潜む性情の中に、その代作の傾向の契機を見付けようと思う。

と述べられている(補注二十三)。  
村山出氏は、久米常民氏と吉永登氏を例示されながらなお対立点があるとなさり、

憶良の亡妻哀悼説をとられる久米氏は、「日本挽歌」は憶良が自分の亡妻の霊に捧げたものと考えておられる。他方、吉永氏は、憶良が他人になり代わつてその気持ちをうたう特色は「日本挽歌」にも及ぼして考えることができることとされ、特に従来憶良の亡妻哀悼説の有力な根拠ともなつていた憶良の作中の「妹」の死期が旅人の妻のそれと一致しないと見る説を詳細に論破されて、「日本挽歌」の旅人の亡妻弔問説を強く支持されたのであつた。この説は旅人の亡妻弔問説を立論するにあつての最大の障害を払拭されたもので、代作説を一歩前進させたものと云えるであらう。

私見としては「日本挽歌」一篇はやはり代作と考えるべきであらうと推定するが、その根拠は、疑いをもつて見られてゐるこの歌以外に憶良の妻が死亡したという徴証が得られないこと、長々しくかつ形式張つたように感じられる漢詩文に官職名までも記した左注を伴つてゐることなどに求められる。また、一般的に代作は歌に巧みでない人のためにするものと云われるのであるが、公的な場ではそのような理由だけではなく代作歌が呈上されてゐるようであり、一方では創作的な代作歌がつくられて行く実情が認められるのであつて、一般論によつて拘束できないのではないかと思う。このような理由から一篇を代作と推定してゐるのであるが、それにしても、作品に即して見に行くとい篇の構成をどのように捉えるかという点で、なお検討を要するところがあると思われる。従来考察するにあつては主とし

て歌の面から探られてゐるのであるが、先行する漢詩文がどのような性格のものとして歌に関わりを持つてゐるのであるかという点の考察も蔑ろにしてよいものではなく、この一篇の性格を明らかにする上で、むしろ必要なことであると考へられる。

となさり、さらに、

縷々と述べてきたが、「日本挽歌」一篇は、悼亡詩文の性格からも代作と見ることができるよう思われるのであり、詩文・歌ともに代作的手法を用いた作品を對照的に配し、構成としても整えられた連作で、旅人の悲傷の心に応え得る、随分儀礼の意もめらわれている勞作であつたと言へるように思う。

と述べられている(補注二十四)。

鉄野昌弘氏は、稲岡耕二氏・井村哲夫氏の論文から読み取

り、漢文の理に對して、やまと歌の情を對置させてゐるのだと説く。確かに、詩文が仏教語を交えた抽象的な表現に終始してゐるのに對して、「日本挽歌」は具体的に即し過ぎるほどに即して、異境で妻を失つた老人の生の声を伝えている。しかし詩文の側も、決して理そのものを整然と述べたものでないことは、見た通りである。

漢文から詩へ、長歌から反歌五首へと、二つの部分は、それぞれの内部に、矛盾・葛藤と、それゆへの展開をはらんでゐた。この世に生きる支えを失つて、來世を願う氣持と、自分のしてしまつたことを悔やみながら、いつまでもこの世にわだかまる氣持、それはともに、それぞれの文体でしか語り得ない事柄だろう。そしてその相反する両者は、しかしながら、ともに憶良にとつては真実なのだろうと思う。旅人はどう感ずるのか、おそくは答へないその問いを、憶良は投げかけてゐるのではなからうか。

と述べられている(補注二十五)。

大久保廣行氏は、

「日本挽歌」といふいささか特異な題目に着目して、「日本」が第七次遣唐使派遣の使命に由来するものであること、さらに言えば、そ

れは七世紀末から八世紀初頭にかけての東アジアにおける日本国の定位という政治的外向的重要課題とかわつていったこと、また「挽歌」はその原義的用法を示そうとしたものであることなどを確かめ、両者を結びつけて大宰帥たる大伴旅人の妻の死を哀悼するにふさわしい独自の標題としたものであることを考察した。

とりわけ「日本」を特記した裏には、筑紫の地から大陸に向かつてこれこそ日本の挽歌よと誇示する気概さえ窺われ、事実和歌そのものも「伝統的挽歌の発想」に深く根ざした完成度の高いものとなつている(村山出氏前掲論文)。「日本挽歌」という簡潔な題詞は、パラフレイズした散文的な表現とは異なつて、先行する詩文に対応させて詩題を思わせるものである。憶良以外に、「貧窮問答歌」(五八九一・八九三)や「好去好来歌」(五八九四・八九六)といった四字の漢語表現も標題として用いてもある(文章では「沈疴自哀文」(卷五)がある)。これらは、だれがいつどこで何を詠んだ歌かを示す通常の題詞形式とは明らかに異質で、やはり中国詩に対して意識的に漢風表現を試みたものと見られる。これも漢和融合を目指した筑紫文学圏の手法の新しいと言えようか。

後年憶良は「倭歌」の語を題詞に用いているから(「書殿餞酒日倭歌四首」(五八七六・八七九)、此の歌も「悲傷亡妻倭歌」とでもしてよかつたところを、取えて「日本挽歌」と打ち出したのは、そこに体験や思いや自負を一杯に込められたのである。簡潔であるだけに含み持つ意味は大きく深いと言わなければならぬ。

先立つ悼亡文には「蘭室の屏風」や「枕頭の明鏡」が取り上げられていることから、亡骸を前にした家の中で、さらに中心の長歌と反歌三首は葬送時に、末尾の反歌二首は時を隔てた後日にとつて、この三部作には詠まれた時と場に流れが考慮されていて、潘岳の「悼亡詩三首」(『文選』卷二三・哀傷)の展開にも通うものがあり、「詩文・歌ともに代作的手法を用いた作品を対照的に配し、構成としても整えられた連作」(村山出氏前掲論文)に仕上がつている。潘岳や陸機ら六朝の詩人たちは時として同じテーマを詩と賦の両様の形式

に託して描き、様式間の相互関連性とも言うべきつながりが強く内在するのが六朝文学の一つの特質として指摘されているが(興膳宏氏『中国詩文選10 潘岳 陸機』)、憶良のこの三部作の形式もその流れに立つて、それを総合的に一体化したところに新味を打ち出し、そのまま以後の筑紫文化圏が獲得する新機軸の文学様式に連なつてゆくのである。

と述べられている(補注二一六)。

辰巳正明氏は、「日本挽歌」の長歌を引用し、

大伴旅人の妻が、大宰府に来てまもなく亡くなった時に、憶良が詠んだ挽歌である。旅人は神亀四年(七二七)の末か五年の初めに、大宰府の帥として着任した。妻と同行したが、若い妻は旅の疲れで早々に亡くなつたらしい。旅人一行を迎えたのは、大宰府の役人のほかに、筑前の国守である憶良であった。

この挽歌が旅人に献呈されたのは、左注によると神亀五年七月二十一日だと思われるから、妻は六月ごろに亡くなったのであろう。異国にまで慕つてついでにきた妻であるだけに、長官旅人の悲しみは深く、周囲の慰めは言葉にならなかつたに違いない。憶良は、そうした長官の悲しみを慰めようと、漢文の序を付けた無題の詩と、この「日本挽歌」を作り献呈したのである。

序文では仏教の無常観が述べられており、いかなる聖人賢者も死を免れられないことを以て、死の無常性を説き、また、夫婦の姿と妻が死を迎えない時の男の悲しみを述べる。

漢詩では、妻が浄土へと去り、苦海の煩惱も消滅したことを述べているが、この歌では、夫婦の愛の姿と、残された夫の悲しみを述べている。一方は愛着を去つた妻の姿であり、一方は愛着の中に嘆く夫の姿である。この二つを一对としたのは、人の死という問題をめぐる、憶良なりの死生観によるものである。

しかもこの歌は「日本挽歌」という。いかにも、大げさな題名である。挽歌は死者哀悼の歌であるが、それに「日本」と題したのは、特別な意味がある。一つには、「挽歌」というのは中国の漢詩に見られ、死

者の棺を造る時に木を鋸で挽きながら悲しみの歌をうたうことから挽歌と呼ばれたのであるが、それを前提として日本の挽歌を詠むという意味がある。もう一つは、先の仏教的内容の漢詩に対して、仏教思想の説く愛河や苦海を理解しながらも、人間としての深い情愛（愛着）を歌によつて表現しようとしたことである。その情愛こそが、日本人の風土に根ざした悲しみの心という意味であつたのであり、死者への深い愛着の心であつた。

そうした思いは憶良の無題詩の序文に、赤ら顔の美しい妻は、女性的美徳とともに永久に去り、かつて一緒に年を取らうと約束したことに背き、いま私は妻のいない人生を、孤独に生きることとなつた。妻の寢室の屏風は空しく張られていて、それを見ると断腸の思いが増し、枕元の磨かれた鏡は空しく台に懸かつていて、それを見るにつけて血の涙が流れる。しかも、黄泉の門がひとたび閉ざされると、もう二度と会うことはできないのだ。という深い嘆きが描かれるのである。

ひたぶるな亡き妻への思いは、中国の士大夫のすべきことではない。しかし、憶良はこの妻の死に対して、「士」としての対面も面目も棄てたのである。愛する者との人生上の出逢いである一期一会、そこに訪れる別れの深い慟哭、それほどの深い悲しみや嘆きこそが、日本人の悲しみの姿だといふのである。それはまさに「愛着」の姿である。それをもつて憶良はこの作品を「日本挽歌」と呼んだのである。

となさり補注二一七）、さらに、旅人の妻の状況に触れながら、大宰府は遠の朝廷とも呼ばれ、もう一つの朝廷ではあつたが、奈良の平城京から見れば遠い鄙の地でしかない。選曆も過ぎた旅人にも、負担の大きい任務であつた。それよりも、妻の負担が大きかつた。妻の死は着任早々の出来事であり、従者たちも驚くばかりで、なすすべもなかつたに違いない。この悲しみを旅人自らも、「世の中は空しい」と一首の歌に詠んでいる。

憶良の勤める筑前の国府は、大宰府に置かれていたから、この事件は憶良にとつては他人事ではなかつた。おそらく、葬儀の諸事万端を憶良が取り仕切つたものと思われる。都では三位中納言という高級

官僚である旅人は、従五位下の憶良とは雲泥の身分差であるから、奈良の朝廷では、遠くにあつてかきずく雲上の人であつた。それがこの事件を通して、旅人の悲しみの深さに思いを致し、慰めの言葉をかけることとなり、後に二人は歌を贈答する友人となる。この歌は、妻の埋葬もすみ、墓での最後の別れに、旅人の心を察して詠んだものである。これから家に帰ると、妻のいない家の悲しみが思われるだろうこと、妻と過ごした寢室が寂しく思われたらうことを詠むこの歌には、過去に経験した者の実感が感じられる。それは旅人の同情であるとともに、憶良が愛した妻への思いでもあつたように思われる。

と述べられている（補注二一八）。

中西進氏は作歌動機を「愛と形との喪失・人間内省」と捉え、それを具体化したのが「日本挽歌」であろうと推測なさつてゐる。同様に、井村氏は「惻隱の情」、村山氏は「憶良の妻の死が証明されないことによる代作説」、鉄野氏は「矛盾と葛藤からの展開」、大久保氏は「体験や思いや自負」、辰巳氏は「長官の悲しみを慰める」と、各々推測なさり、論文を読む限りに於いて、どの説も首肯できそうだが、以前から提唱されてきたらしい「憶良の妻死亡説」は、これが証明されない限り、または、万葉集や散文に残つていない限り、推測の域を飛び越えることは危険であろう。そのように考えると、作歌動機の直接的な起因は「旅人の妻死亡説」、または、そこから「旅人の気持ちにより添つて、憶良が代作した説」を支持したい。その意味では辰巳氏の推測が私には一番理解しやすく、頭の中にすぼつと入つてくる。また、村山氏の推測も慎重ながら、憶良であればこういう風に来るだろう想像が十分に成立しそうなので、私は見逃せない説だと感じる。中西氏の説も、憶良の内面と歴史的知識から深く鋭く攻めていて、しかももしその推測が正しければ十分あり得そうな気がする。中西氏の説も捨て難い。いや、捨て難いと言うよりも、かような真実に近いような気がしてならない。憶良に於ける代作の問題は先哲諸氏がいろいろな場面で自説を発表なさつていたので、別稿で改めて考えることにして、今回は一旦保留とさせていた

ともあれ、単純に万葉集に収録されていた順番に考察してきた憶良論が、「日本挽歌」に至って様々な問題が浮かび上がり、それらの問題に対して先哲諸氏は様々な角度から研究を加え、その成果が現在に至っていることは疑う余地はない。

そして、憶良を含め、「万葉集は既に研究し尽くされている。」と言われる昨今に於いても、いまだに決着していない課題が多々あり、未だに大いなる疑問があると言わざるを得ない。私は、その混沌とした状況を、数に限りがある、現存する資料が少ない中で、如何に理解していくか、どのように考えることで憶良や万葉集の謎を解く鍵に繋がるのか、やはり、今後の研究の進展を待つしかないのだろうか。それにしても、たった一つの歌群からこれだけ問題点があぶり出され、各氏が論文を発表していないながらも決着を見たい、歌集も珍しいと思う。これは古典の定めというか、親筆が発見されない限り、またはその時代に立ち会わない限り推測の域を出ないのかも知れないが、少なくともいろいろな方がいろいろな意見を出し合って検討し合い、整理し合い、より高い次元に向けて、万葉集の真実を発見するために、微力ながら努力しようと思っ  
う所存である。

### 補注一覧

- 一 拙稿「山上憶良研究——三三七番歌を中心にして——」『国語論集十』平成二十七年三月 北海道教育大学釧路校国語教育研究室所収 pp.52-75
- 二 本稿の執筆に当たり、万葉集の原典を「桜楓社本」により、訳文を「稿本」によった。
- 「萬葉集」編者 鶴久・森山隆 昭和五十九年一月 桜楓社發行

「萬葉集 訳文篇」 佐竹昭広 木下正俊・小島憲之共著 昭和五十二年三月 塙書房發行

※ なお、本稿の執筆に際し、右に挙げた二冊の本を底本とし、そこから必要に応じて文献や論文に合わせた表記をしていること

を付記しておく。

- 三 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広氏校注・訳『萬葉集二』昭和六十四年四月 小学館發行 pp.46-52
- 四 針原孝之氏担当「上代の和歌」(小池一行氏・半田公平氏・島原泰雄氏共著『和歌文学の流れ』平成十七年四月 新典社發行所収) pp.9-90
- 五 針原氏は、「巻五は雑歌。筑紫における旅人と憶良の歌が大部分で、一―四首を収めている。この巻の筆録者については憶良旅人説がある。」と述べられている。
- 六 中西進氏「日本挽歌」『成城国文学論集』第三輯昭和四十六年九月(『山上憶良』昭和四十八年六月 河出書房新社發行所収) pp.230-231, 233
- 七 大久保廣行氏『日本挽歌』の標題「東洋大学・東洋学研究所」『東洋学研究』第三四号一九九七年二月(『筑紫文学圏論 山上憶良』一九九七年三月 笠間書院發行所収) pp.75-101
- 八 原田貞義氏「大伴旅人」『報凶問歌』をめぐって『国語国文研究』第五十号昭和四十七年十月(『読み歌の成立―大伴旅人と山上憶良』二〇〇一年五月 翰林書房發行所収) pp.49-59
- 九 稲岡耕二氏『人物叢書 新装版 山上憶良』二〇一〇年十二月 吉川弘文館發行所収 pp.113-131
- 十 補注六に同じ。
- 十一 補注七に同じ。
- 十二 補注六に同じ。
- 十三 林田正男氏「万葉集巻五のなりたち―前半部を中心に―」『国語研究』第四号九州大谷短期大学昭和五十年十二月(『万葉集 筑紫歌群の研究』昭和五十七年五月 桜楓社發行所収) pp.32-7

- 0)
- 十四 井村哲夫氏「憶良における漢文・序・歌の全体をどう把握するか」『国文学解釈と教材の研究』學燈社平成二年五月『憶良・虫麻呂と天平歌壇』一九九七年五月 翰林書房発行所収) pp.34-45  
補注八に同じ。
- 十五 原田貞義氏「酒と子等と」『国語と国文学』第六十九卷二号平成四年二月『読み歌の成立—大伴旅人と山上憶良』二〇〇一年五月 翰林書房発行所収) pp.79-101
- 十六 原田貞義氏「贈答応酬歌の流れ—万葉集卷五前半部の編纂方をめぐって—」『万葉研究』十五号平成六年十二月『読み歌の成立—大伴旅人と山上憶良』二〇〇一年五月 翰林書房発行所収) p.337-344
- 十七 村山出氏「日本挽歌—悼亡詩文の構成の面から—」万葉学会『万葉』第五七号昭和四十年十月『山上憶良の研究』昭和五十一年十月 桜楓社発行所収) pp.49-64
- 十八 鉄野昌弘氏「日本挽歌」『セミンナー 万葉の歌人と作品第五卷 大伴旅人・山上憶良(二)』企画編集神野志隆光・坂本信幸 二〇〇〇年九月 和泉書院発行所収) pp.34-52  
補注九に同じ。
- 十九 辰巳正明氏「愛河ノ波浪ハ已先ニ滅ビ、苦海ノ煩惱モ亦結ボホルコトナシ。従来コノ穢土ヲ厭離ス。本願ハモチテ生ヲ彼ノ淨刹ニ託セム。」『コレクション日本歌人選〇〇二 山上憶良』二〇一一年六月 笠間書院発行所収) pp.008-009  
補注六に同じ。
- 二十 井村哲夫氏「Egoist 憶良—作品形成の契機としての性情論—」関西大学『国文学』三五昭和三十九年一月『憶良と虫麻呂』昭和四十八年四月 桜楓社発行所収) pp.151-167  
補注十八に同じ。
- 二十一 補注十九に同じ。

- 二十六 補注七に同じ。
- 二十七 辰巳正明氏「大君の遠の朝廷と」『コレクション日本歌人選〇〇二 山上憶良』二〇一一年六月 笠間書院発行所収) pp.011-013
- 二十八 辰巳正明氏「家に行きて 如何にか 吾がせむ」『コレクション日本歌人選〇〇二 山上憶良』二〇一一年六月 笠間書院発行所収) pp.014-015

(ますこゆうじ／北海道稚内高等学校)